

保険教育と保険学の体系

—テキストの考察（戦前）—

小 川 浩 昭

目 次

1. 問題意識
2. テキストの考察
3. 外国の文献について
4. パターン化した考察

1. 問題意識

小川[2008]では、保険学の体系を考察するために、保険学のカリキュラムについて考察を加えた。そこでの問題意識は、学問体系はカリキュラムやテキストに如実に表れるので、保険教育の危機的状况に際して、カリキュラムやテキストという具体的題材から今後の目指すべき学問体系を考えるというものであった。小川[2008]ではまずカリキュラムの考察を行い、テキストについては別途行うこととした。本稿では、テキストについて考察する。

一口にテキストといっても、古今東西さまざまなものがあって、その数は膨大なものになると思われるので、明確な目的をもって何らかの分類を行った上で取り上げる必要がある。わが国では、戦前に伝統的保険学と称することができる保険学が形成され、さまざまな論争を経ながら戦後に継承され、いつしか軽視されていったといえるので、大きく戦前、戦後に分けて考察することが有意義であると考え。テキストの面から伝統的保険学の特徴を確認し、それが戦後にどう引き継がれ、その後どのように展開し、現在に至ったのか、また、そのような過程で海外の研究やテキストがいかなる影響を与えたのか、といっ

た視点から考察する。ただし、これらすべてを考察するとなるとかなりの量となるので、本稿ではこのうち戦前のテキストについて考察し、伝統的保険学の特徴を明らかにする。

2. テキストの考察

テキストと研究書の大きな違いの一つは、前者は通説を体系的に整理し、理解し易さが重視されるのに対して、後者は独自性のある掘り下げた考察がなされるというところであろう。しかし、戦前のわが国において、保険に関する学問自体の形成時期は、外国の保険学の輸入という側面が強いので、出版された文献は総じてテキスト的な色彩が濃いといえるのではないか。反面、通説自体が確立していないので、論争的、研究書の色も濃いといえよう。海上保険、火災保険といった保険各論的な文献ではない、保険全般をカバーする文献は、こうした両面を兼ね備えているものが多い。この点を踏まえながら、戦前発行された保険関係のテキスト的な文献を取り上げる¹⁾。

(1) 奥村英夫[1912], 『保険通論』第3版, 東京博文館(初版は1903年)。

奥村[1912]は、保険に関する知識は多面であり、医学、法律学、経済学、農業、建築術、航海術などと関連するとして、今日の総合保険学的把握に連なる考察をする(奥村[1912]序)。

第1編「保険の歴史」は、保険を設備と捉え、保険に類似する設備は歴史中最古より存在していたので、保険の淵源も深遠にして議論が多く、保険史の考察を行うことで保険概論の総論とする。「保険は偶然なる危険に因りて生ずる経済的損害を填補するを目的とせる設備の一つなり」(同p.1)と定義文ともとれる記述がある。保険の淵源は、冒険貸借と中世欧州北部で発生し、ギルドなどに発達したものの二つとする。なお、ここで取り上げられている史実は、今日のテキストでも取り上げられている史実とあまり変わらない。

1) 本稿で取り上げる文献の選定にあたっては、次の文献を参照した。粟津[1921]pp.107-120, 柴[1931]p.246, 酒井[1934]pp.175-194, 三浦[1935]pp.49-50, 大林[1995]pp.275-285。

第2編「保険の普通本体」は、保険の本質について考察する。保険の目的は、危難の偶然的発生による経済的損害の除去または軽減にあるとする。その目的を達成する設備である保険の本質的要素を同危険の団体、損害の分配とする。本編では保険の種類（分類）についても考察している。その内容は表1のとおりであるが、分類基準は今日とあまり変わらないものの、「単面保険」、「資金保険」など今日では見られない名称が用いられている。また、「危難」という用語も、今日では見られないものである。

表1. 奥村[1912]における保険の分類

分類基準	分類
保険者の種類 危難の客体または存在場所 保険金支払いの方法 保険金の性質 危難の客体の種類	相互保険と単面保険 海上保険と陸上保険 資金保険と年金保険 損害保険と定額保険 人保険と物保険とその他の保険

(出所) 奥村[1912]pp.127-129の論述から、筆者が作成。

第3編「保険技術論」は、保険事業の隆盛をもたらしたとする保険技術について考察する。保険技術は目的を便利に達するすべての知識および完成するに要する一切のものであり、一種の経済技術とする。したがって、数学、統計学、医学、工学、農学、経済学、法律学等種々なる知識が含有されるとする。なお、本編は106頁もの考察となっている。

第4編「保険法論」は、保険活動を強制的に限定する一切の法律規定である保険法を考察する。保険契約法と保険監督法に分けて考察する。今日の通説とは逆に、保険を射倖契約ではないとしているのが注目される。

保険の本質を重視しているが、一つのパターンとしてみられる、保険学説を取り上げ比較検討しつつ自らの保険本質論上の立場を明らかにする（保険を定義する）ということも行われていないことが注目される。また、歴史が重視され、保険の団体性が強調され、本質把握が損害に基づくこと、相互扶助性が強調されていないことも注目される。保険技術を重視する点にも特徴があるとい

えるが、今日パターン化している保険の要件、保険の分類の考察もみられる。

(2) 粟津清亮 [1921], 『保険学綱要』改訂版, 巖松堂。

粟津 [1921] は、経済学から保険の原理、政策に加えて各種保険の組織を論ずる保険の総合的研究を目指す。大きく第1編緒論, 第2編総論に分かれる。

第1編第1章「保険の字義と観念」は、保険は「危険を保証する」という意味で用いられたとの紹介を行うが、「ホシヨウ」の漢字が「保証」となっているのが興味深い。また、保険の根本観念として相互扶助ないしは団体の存在を主張する者が多い中で、これを否定する見解が紹介され、両者が比較されるが、著者(粟津)は前者の立場であるとする。

第2章「保険の起源」は、現代的保険, 原始的保険という分類に対して、原始的保険を太古の思想的保険に限定し、中世以後と分けて、原始的保険, 中世的保険として考察する。原始的保険についてはコレギア・テヌイオルムなどが紹介され、保険の思想は人類の本性に存する思想とする。続いて中世的保険が紹介されるが、ここで冒険貸借も取り上げている。ギルドも取り上げ、中世のギルドを現代の諸種の保険の起源とすることに異論がないとしているのが興味深い(同p.22)。もちろん、この見解が保険の相互扶助性重視の見解と結びつく。

第3章「保険類似の制度」は、第2章で考察した保険の起源的な制度を保険類似制度とできるがそれらを考察するのではなく、現代において保険事業と類似する制度を考察する。ここでは救済組合を3つに分けて考察する。

第4章「保険の講究」において、ようやく保険の考察がなされる。保険の考察は本来経済学的になされるべきであるが、スミス(Adam Smith)は取り上げているもののスミス以後のミル(John Stuart Mill)などの英米経済学者にはほとんど見るべきものがないとする。その理由を保険がすでに発達した一種の専門企業であることに求め、一般経済学者の関心に結びつかなかったとする。続いて、分化的講究として、アクチュアリー学, 保険医学, 保険法, 労働保険の考察がなされる。続く総合的講究では、保険の経済学における地位, 大学等の教科, 国内外の文献を紹介する。

第2編「総論」第1章「保険の要素」では、保険を次のように定義づけた上で、保険の要素（必要元素）を危険の前提、多数人員の結合、出資に求める。

保険とは同種の危険を恐るる所の多数の人員が集合して団体を作りその一員が被りたる損害を総員が分担して補償する所の行為なり。（同p.121）

危険については、危険に必要な条件を考察し、不慮なることをあげる。不慮なることとは、発生の時期がわからないこととされるが、それには絶対的と相対的の区別があるとする。絶対的とは予知ができないことであり、相対的とは放火、盗難等の人為的危険であるが、この区別は根本的ではない（同p.123）としているのが興味深い。また、同種類の危険であることを要するとする。多数人員の結合については、保険を多数人員の結合をもって損害補償の目的を遂行するものとする。出資については、現在の保険は友誼人情を必要としない各人の利害の一致を基礎とする純然たる経済制度にして、危険の程度に相当する出金、保険料、掛け金・拠出金の支払いを不可欠の要素とする。確かにその通りであるが、保険料の拠出を「出資」と表現してよいのかは疑問である。

第2章「保険と類似行為の移動」は、いわゆる保険類似制度の考察で、賭博、保証、貯蓄、奇捨が考察される。

第3章「保険の組織」は、保険制度の構成に不可欠な多数人員の集合について、どのように集合するか、団体の性質はどのようなものか、各員相互間の関係をどうするか、事務の担当者をいかに定めるかなどが問題になるとし、保険組織の種類として多数人員の直接団結による相互保険組織と間接的な結社である営業保険組織に分かれるとして、考察する。もともと、混合保険組織を指摘しており、それは営利保険組織であるにもかかわらず団体各員に利益の一部を分配し、または、相互保険組織であるにもかかわらず株式会社のような確定保険料方式をとる組織とする。しかし、これは混合保険組織として捉えるよりも、相互会社と株式会社の収斂現象として捉えるべきものであろう。保険本来の組織は相互組織とし（同p.154）、また、保険事業の本来の性質は相互救済の媒介に過ぎず、資本の効用はもっぱら保証の力と一時必要なる融通にあるのみ（同

p.169)として、保険を相互扶助制度と捉えていること、保険資本が担保資本としての意味ぐらいしかなく、創業資本が僅少ですむことが示唆されている点が注目される。

第4章「保険の行わるる範囲」は、保険成立の限界について考察する。至大なる危険、過小なる危険、多数の人が一般に感じることのない危険、頻度の高い危険、統計しがたき危険、数学的危険の過多なる危険に対しては、保険は成立しがたいとする。最後の数学的危険の過多なる危険とは、偏差の大きい危険という意味に思われる。

第5章「保険の種類」は、保険の分類(区別)を行う。危険の種類を基準として疾病保険、火災保険、盗難保険、損害の性質を基準として損害保険、利益所有者の定額保険、単純なる定額保険、保険契約の方法を基準として超過保険、一部保険、全部保険、協同保険、重複保険、同時保険、順次保険、集合保険、包括保険、継続保険をあげる。そして、保険の目的の性質の基準が経済学的には最適であり、この基準に基づいて現在の保険を列挙するとして、物保険、人保険、無形利益の保険に大分類して各種保険を列挙する。

第6章「保険経営の主義」は、営利主義と非営利主義、公立主義と私立主義、自由主義と強制主義、平均保険料主義と等級保険料主義、集金主義(賦課式)と前納主義について考察する。ここでも、保険事業には相互救済を媒介することと他人の損害を引き受けることの2方面ありとして、相互扶助を強調する(同p.214)。

第7章「保険の利益」、第8章「保険の弊害」は、保険のメリット、デメリットを考察する。「保険の利益」では、直接利益、間接利益に分けられ、間接利益では社会に巨大なる資本を供す、社会の信用を発達させるなどとして、いわゆる今日みられる保険の機能や効果の考察といえる。また、本書を通じて保険金融に関する言及が少なく、ここで「巨大なる資本を供す」(同p.242)として言及するぐらいである。「保険の弊害」では、今日いうところのモラル・ハザードに関わる指摘がなされる。

理論、政策、歴史がバランスよく体系的に配置されているわけではなく、理論を中心に歴史についてもある程度詳しく論述されているといえる。保険本質

観として、相互扶助性と保険団体を重視しているといえる。しかし、保険団体の形成について、保険の二大原則（給付・反対給付均等の原則、収支相等の原則）への言及はない。今日パターン化している保険類似制度や保険の分類、保険の機能・効果についての考察などが行われているのも注目される。

(3) 志田鉦太郎 [1927], 『保険学講義』 明治大学出版部。

保険学を保険という経済制度を研究する科学とし、経済学の一分科に属するとする。保険はさまざまな学問と関わり、保険法学、保険数学、保険統計学、保険医学等があるが、これらが保険学を構成するのではなく、保険学の補助学とする。かかる保険学は、すべての保険に共通なる法則を研究する保険総論と個々の保険種類に固有なる法則の研究をする保険各論に分かれ、本書は前者のみとする。

第1章「保険の意義」は、マーネスの定義を踏襲しつつ若干の修正を加えた定義文に基づき、保険の要件を導き出し、要件を個別に考察する。その定義とは、次のとおりである。

保険とは偶然性を有する特定の原因事実を予見し之に因り惹き起こさるべき財産を予定する多数の人々が結合し其原因事実の発生したる際予定せる財産入用を充足するため各自が計算上公平なる分担に任ずる経済制度なり。(同p.8)

財産入用説の立場に立ち、保険の要件として偶然性、財産入用、多数人の結合、公平な分担、経済制度をあげる。

第2章「保険の分類」は、保険の要件とした5点から保険の分類を試みる。その分類は、表2のとおりである。さまざまな基準からの保険の分類には言及せず、明確な意図をもった保険の分類しか行われぬのが注目される。

表 2. 志田[1927]における保険の分類

分類規準	分類
偶然性を有する特定の原因事実	絶対的偶然事実保険と相対的偶然事実保険
偶然性を有する特定の原因事実	火災保険、海上保険、運送保険、生命保険、その他の保険
偶然性を有する特定の原因事実	人保険と財産保険
財産入用	損害保険と定額保険
財産入用	任意保険と強制保険
財産入用	原保険と再保険
多数人の結合	普通保険と社会保険
多数人の結合	国家保険、株式会社保険、相互保険
公平なる分担	有限責任保険、保証責任保険、無限責任保険
公平なる分担	賦課保険と定料保険
公平なる分担	持寄保険と集金保険
経済制度	公保険と私保険
経済制度	公共保険、相互保険、営利保険

(出所) 志田[1927]pp.24-48の論述から、筆者が作成。

第3章「保険に類似する制度」は、保険類似制度を考察する。保険類似制度として、自分保険、貯蓄、保償、救済、信託、無人、博戯・賭事その他の射倖契約が取り上げられる。自分保険という用語が注目される。従来自己保険、自家保険と呼ばれたものを自分保険とするとしているが、肝心の理由が明らかにされていない。また、保険は、保険加入者も保険者も偶然事実の実現することによって利益を得るものでもなく、実現しないことによって不利益を被るものではないので、射倖性を有さずとしているのが注目される。保険の射倖性把握は保険法学に見られ、このような把握は形式的法律学の短所と批判する（同 p.60）。しかし、偶然事実が実現すれば保険加入者は保険金を受け取り保険者は保険金を支払わなければならない、実現しなければ保険金の受け払いは発生しないのであるから、この点は明らかに誤りである。射倖性を損得と結び付けて把握するのではなく、偶然によって資金の受け払いが発生する点に求めるべきで、このような理解に立てば今日の通説のように保険契約は射倖契約とすべきであろう。だからこそ、モラル・ハザードに注意すべきとの議論にもなる。なお、「保償」という漢字も注目される。通常、「ホショウ」は「保障」、「保証」、

「補償」のいずれかである。戦前のテキストにおいても、そして今日でも、「保証」を保険類似制度として捉えるのが一般的である。さらに、救済を保険類似制度に含めているのも注目される。救済についての考察で、社会的連帯は相互救済ではなく相互依存であり、保険を単純な相互依存としてその相互扶助性を否定しているのも注目される（同p.69）。

第4章「保険の効用」は、保険の効用を経済上のものと一般社会生活上のものに分けて考察する。経済上の効用については、経済を私経済、公経済、国際経済の3種に大別して考察する。私経済上の効用として、経済生活の安定、信用の増進、所得の維持および構成、資本の維持および構成、企業欲の増進をあげる。国民経済上の効用としては、私経済上の効用の反射（資本、労働、土地、企業の安定）、多数私経済間の連鎖、加入者分担額の集積、保険の国営をあげる。国際経済上の効用としては、私経済上および国民経済上の効用の反射作用として国際経済上の安定、進歩、発達をあげる。一般社会上の効用としては、健全なる社会精神の鼓舞、自制心の発達、耐忍力の要請、新種の気性の滋養、家庭生活の安定、災厄を避止する方法の発達の促進をあげる。

第5章「保険の濫用」は、保険の濫用について保険加入者側、保険者側に分けて考察する。保険加入者側については、モラル・ハザードという用語を用いてはいないが、いわゆるモラル・ハザードについてである。保険者側については、保険加入者の保険料を原資とする保険資金を自己のものとして勝手に処分するという資金運用上の危険性や保険の専門性から虚偽的な説明をする危険性である。

第6章「保険の発達」は、保険史の考察である。保険の形態は、冒険貸借をはじめとする海上リスクを処理する制度の発展、利得心の発展によって完成したとする。しかし、保険は共同心と利得心との両面にその発生原因があるとのマーネス（Alfred Manes）の見解を支持し、利得心によってひとたび完成し、共同心によって直接の保険形態を完成させようとの動きが生じたとする（同pp.96-99）。海上保険がまず完成して、火災保険、生命保険が直接、間接の影響を受け、逐次完成したとする。保険の将来として、社会化、国家化、国際化を指摘する。

第7章「保険の拡張」は、保険の将来について、学理的に研究する。保険の限界を超えて拡張がなされるので、保険の限界の考察である。なお、1906年ベルリンで開催された第5回保険学会で「保険 possible の限界」という問題が議論され、わが国では栗津博士が『保険学要綱』で「保険の行わるる範囲」としてこれを紹介してからはパターン化したとする (pp.103-104)。

第8章「保険事業の構成」は、事業を人的構成と財的構成に分けて考察する。本章では人的構成を考察し、第9章「保険事業の経営」で財的構成を考察する。

第10章「保険政策」は、保険の政策について考察する。権力団体が権力を行使して行うのが政策であり、権力団体には国家と国際団体の二種があるため、国家政策と国際政策の二種となるが、国際政策はいまだ十分に発達していないので、国家政策としての保険政策のみを取り上げる。保険経済政策、保険財政政策、保険社会政策、保険刑事政策、保険教育政策に分けて考察する。

保険の定義文→保険の要件というパターン化した考察をするが、保険学説自体の考察は行われない。戦前のテキストでは「施設」という用語が多用されるが、本書では戦後多用される「制度」という用語を基本用語としているのが注目される。また、保険史の考察に対して、各種保険のそれぞれについての歴史が考察されるべきであるので、保険総論における保険史は、真正保険の出現した由来を明らかにし、次にいかなる順序で各種保険が発達したかを略述し、現在の趨勢に鑑みて将来の発達を説けば足る (同pp.94-95) としているのが、興味深い。総論の中で保険史として考察するか、各論としてそれぞれの保険史を考察するか、単純な二者択一ではないにしろ、どちらかに力点を置かざるを得ない。いわば後者に力点を置くべきというのが本書であるのに対して、他のものはほとんど前者に力点を置いている。さらに、保険政策を独立した章として設けているのが注目される。

保険学の本質、保険の意義 (保険本質論、保険の定義)、保険の要件、保険の分類、保険類似制度、保険 possible の範囲、保険の利弊、保険史、保険政策などの戦後にも繋がるパターン化した考察の多くが、本書で確立したといえるのではないか。

(4) 小島昌太郎[1929], 『保険学要論』日本評論社。

本書は、次のような意図からまとめられた。すなわち、従来の研究が海上保険、生命保険、社会保険といった個別的研究であり、また、法律的もしくは数理統計的なもので科学的研究とはいえず、科学的研究とは保険の本質に立脚した科学的な成果であるべきとして、このような意味での科学的研究として取りまとめたものとする。

第1章「緒論」は、経営、経済との関係から保険がいかなるものであるかを説明する。保険を経済準備の一形態とし、交換原則のもとに行われるとする。なお、本章で保険者、保険契約者、被保険者、保険料率などの基本用語の解説も行われる。保険料率を算定する技術を保険技術としているのが興味深い。

第2章「保険学」は、保険学について考察する。保険は偶然の克服のために偶然を利用するので、この特性故に他の経済現象と異なるため、保険学は経済学のうちにおいて独立の一部門を構成するとする。

第3章「保険の本質」は、本書の核心部分である保険の本質について考察する。保険の本質は、人間行為、人間の作ったある種の仕組みの二つの方面から言い表すことができるとする。前者は動態に着目したものであり、後者は静態に着目したものであるとする。従来の解説は静態に着目していたが、筆者は保険を現在より未来への準備をなす現象と動的に捉えるとする。すなわち、動態に着目して、「吾々の経済生活が、未来に於て偶然なる変化に遭遇することあるも、なお、その所要の物的資料を確実に獲得使用する方法として、同じ事情の下にある多数人を共同して、現在より未来への準備をなす」(同p.54)がごとき経済準備を保険とする。しかし、他方で小島[1925]における定義「保険とは、経済生活を安固ならしむがために、多数の経済主体が団結して、大数法の原則に従い、経済的に共通準備財産を作成する仕組みである」(小島[1925] pp.54-55)を静態に着目した定義とする。動的定義で述べる目的を達成するための工夫としてできたものが静態的定義に述べる仕組みであるとする。大変興味深い定義付けであるが、動態、静態という関係よりも、保険の持つ時代を超えた超歴史性と、あくまで資本主義社会における制度としての保険の歴史性をいかに関連付けて把握するかという問題とすべきではないか。

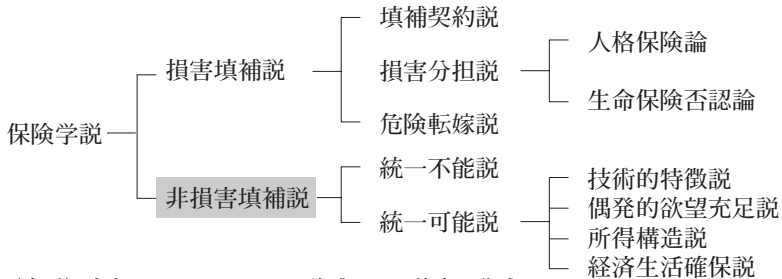
保険を経済不安に対して安定させるための工夫として捉え、経済不安の中身を考察し、その原因を偶然的事件とする。そこで、偶然の考察を行い、保険は偶然を必然化することによって成り立つとする。それは大数の法則にしたがって経済準備をなすことによって実現するので経済準備について考察する。経済準備とは準備財産を作成することとし、準備財産を考察するが、その考察において、銀行預金、郵便貯金も準備財産ではあるが一種の放資であるとして、純粹無色の準備財産は保険のみとしているのが注目される。保険と金融商品の類似性を認めつつも、本質的に異質としているといえ、保険と金融の同質性と異質性の議論といえよう。

なお、本章では保険成立の可能範囲、保険類似制度についても考察している。前者においては、保険成立の条件として、多数の経済主体の結合、相互主義、準備財産作成の標識となる事件が同時発生するものではないことの3つをあげる。後者においては、技術的手段として予防、鎮圧、防衛、経済的手段として貯蓄、無尽または頼母子講、富籤賭博、投機、保証との比較がなされる。今日リスクマネジメント手段ないしは危険対処法として保険とともに体系的に把握されている予防、鎮圧が類似制度として考察されている。

第4章「保険学説の発展」は、従来の諸学者の保険本質論について紹介、批評する。「元来、この保険の本質に関する学説発展の跡を調べるということは、保険学の研究に於て最も根本的の基礎をなす」（小島 [1929] p.150）とし、「欧米の書物の如きに至っては、保険学と題するものであって、保険の本質の何たるかを論述せざるものが頗る多い。そのこれを論述せざるは、これを研究して居ないからである。保険の本質の何ものたるかを研究することなくして、保険を論じ、保険学を建設せんとするが如きは、到底、これを以て学問的な態度と認むることが出来ない。保険の本質の何ものたるを闡明せられて、初めて保険学がその固有の立場を確立し、その本来の領域を明確にすることを得るものである」（同p.150）としているところに、保険本質論を非常に重視する伝統的保険学の特徴がうかがえる。

本章では、図1のように保険学説を整理し、各学説について批評を行っている。そして、著者の立場は、これらの学説とは異なる共通準備財産説である。

図1. 小島[1929]における保険学説の分類



(出所) 小島[1929]pp.149-152の論述から、筆者が作成。
網掛けの名称は筆者が便宜的につけたもので、その他は小島[1929]による。

第5章「保険の歴史」は、保険史の章である。保険類似の制度は種々なる態様をもって現れ、14世紀の後半に海上損害填補契約が「保険」という名称をもつようになったとし、これを原始的保険とする。海上保険は冒険貸借にはじまり原始的海上保険となり、現代保険に発展するまで一元的な系統を示すとする。これに対して生命保険と火災保険は、全く趣が異なるとする。合理的な保険料算出により、保険事業が冒険事業の域を脱するのをもって原始的保険から現代的保険への移行とするが、1720年ごろ海上保険が原始的保険の状態を脱し、現代保険になったと見做す。その具体的表象をThe London Assurance Corporation, The Royal Exchange Assurance Corporationの設立に求める。今日テキスト的な文献で取り上げられる史実はほぼカバーされており、「近代保険」ではなく「現代保険」という用語を使用しているが、保険の近代化について明確に論述している。

第6章「保険の種類」は、いわゆる保険の分類について考察する。本章の目的は、あくまでも現存する保険の種類 of 概説である。学問的分类と名称はその本質に従って立てられるが、実世間の種類は沿革的な理由と実用上の便宜とによって存するので両者は一致しない。そこで、まず学問的分类について解説してから、実際の種類について考察する。なお、学問的分类と実際の種類は、今日風にいえば、理論的分类と便宜的分类となろうか。

学問上の分類・保険分類論(同p.267)として、表3のような分類を行うが、

これらは保険そのものの分類とはいえ、保険の分類は経済生活の不安定を引き起こす原因である事件の種類によるとするのが注目される。かくして、人保と財産保険の2大別がもっとも基本的分類とする。これに対してわが国商法の生命保険、損害保険という分類は、非理論的な分類であり、これ以外の保険は保険と認められない問題のある分類なので、根本的に解決しなければならないとする。なお、再保険は独自の種類を構成せず、元保険が人保、財産保険いずれに属するかで種類が分かるとする。今日の元受保険、再保険という分類をしない。

表3. 小島[1929]の保険の理論的分類

分類規準	分類
経営者の法的性格 公法上か私法上か 加入の動機 社会政策の一つ 経営主義 営利保険の企業形態 相互保険の企業形態	公営保険と私営保険 公法上の保険と私法上の保険 強制保険と任意保険 社会保険（労働者保険） 営利保険と相互保険 個人経営と株式会社経営 組合組織と相互会社組織

(出所) 小島[1929]pp.264-265の論述から、筆者が作成。

続いて網羅的に各種保険について触れるため、120頁もの章となっている。その内容は、保険各論といってよいであろう。

第7章「保険料」は、保険料の考察を行なう。保険は、偶然を利用して偶然を除くことによって共通準備財産を作るものであり、そのための醸金が保険料であるから、保険料は偶然の必然化ということの具体的表象とする。蓋然率がかなり正確にわかる生命保険は、数理的統計的研究によって偶然の必然化が行われるが、火災保険、海上保険は生命保険に比べて蓋然率を根拠とする程度が劣るとする。しかし、火災保険については、競争と協定と反復連続が合理的料率に導き、偶然の必然化が行われるとする。いわゆる「価値循環の転倒性による過当競争の危険性」と同様な見方もみられるが、それを保険経済の特殊性と認識するのではなく、偶然の必然化のプロセスの一つとして捉えているといえ

よう。

第8章「保険事業の経営形態」は、保険者について考察する。保険事業の経営形態は、保険者の企業主体としての資格と事業を実行する組織により定まるとする。保険は保険団体が形成されて初めて成立するものであるから、企業主体が国家、公共団体、私人、株式会社などの場合は企業主体と保険団体が同一ではないが、相互保険組合または相互保険会社の場合は両者が一致するとする。さらに、国営保険、私営保険に分けて各経営形態について考察する。

保険本質論を重視するといえ、そこにおいて相互主義が重視され、保険者が単なる運営者として捉えられている。また、保険金融に関する論述がほとんどないことも注目される。理論・政策・歴史という観点からは、政策がほとんどなく、その点で体系性に乏しいが、120頁にわたる保険の種類への考察は、保険の網羅的考察として他を圧倒するものがある。また、志田[1927]でパターン化した考察の多くが含まれる点が注目される。特に保険史の考察において、保険の近代化が論じられているのは、保険史の考察の発展とできよう。

(5) 柴官六[1931]、『保険学概論』賢文館。

本書は、従来はもっぱら保険の経済的機能のみが取り上げられる傾向にあったが、倫理的または政治的見地からの研究も必要なので、この方面に研究を進めるとする（柴[1931]「はしがき」）。

第1編「概念論」、第2編「経営論」、第3編「政策論」よりなる。

第1編「概念論」第1章「保険の観念」は、保険の本質について考察する。冒頭で保険を次のように定義する。

保険とは人類が共通危険を緩和補正する為に団体を作り、その共栄を図ると共に団員が蒙りたる損害を総員に於て分担救援する制度である。（同p.3）

第1節は「保険の意義」となっているが、保険学について考察している。保険学については、経済学の一分科であるか総合科学であるかの議論があるが、著者は後者の立場に立つとする。なお、前者の立場に立つものとして、志田

鉦太郎，小島昌太郎，米谷隆三，後者の立場に立つものとして粟津清亮，三浦義道をあげる（同p.7）。

保険を自由平等の間に相互扶助思想を教育するのに適切であり，合理的な制度とし，権力を用いずして共存共栄の目的を達成するのに最も理想的な制度とする（同pp.11-13）。そして，保険の要素を危険，協力，準備とする。ここで危険とはリスクのことであり，「将来発生するの惧ある人の災厄」（同p.13）であり，「災害の発生せざる事前の脅威状態」（同p.13）であるとする。また，保険の対象となる危険を「発生が事前に予測し得ない偶発的なもの」（同p.14）として，絶対的偶然性に限定しているのが注目される。協力に関連して，保険制度を「相互扶助若くは社会連帯の実現である」（同p.16）としているのが注目される。準備は定義には直接現れないが，保険は大数法則の応用により危険に予め備えることを主な観念とする。保険の定義文→保険の要件というパターンに基本的に属する考察といえよう。なお，「危険の対策には鎮圧的方法と予防的方法とがある。そして保険が予防的手段の一であるとは普通に学者の説明するところである」（同p.17）とするが，今日のリスクマネジメント手段の体系からは誤りといわざるを得ない。

第2章「保険の特質——類似制度との比較」は，保険類似制度を考察して保険の特質を浮き彫りにする。保険類似制度として，賭事，保証，貯蓄，慈善，自家保険，頼母子，無尽講，共済組合を取り上げる。賭事の考察で被保険利益を保険の前提としているのが注目される。また，保険を「相互救済制度」（同p.21），「相互扶助組織」（同p.22）としながら事前の考察において「保険は自助的行為」（同p.23）としているのは矛盾しないか。

第3章「保険の種類」は，保険の分類を行う。

表4. 柴[1931]の保険の分類

分類規準	分類
生活利益 填補額の確定方法 — 経営主体 保険の性質	人的保険と財的保険 損害保険と定額保険 原保険と再保険 公営保険と私営保険 純正保険と中間保険

（出所）柴[1931]pp.26-41の論述から，筆者が作成。

注）原保険と再保険については，それぞれの保険の意味は記載されているが，基準は明示されていないので「—」とした。

第4章「保険制度発達論」は、保険史を考察する。道義的発達時代、物質的発達時代、精神的発達時代の3時代を経過して発達したとする。保険の必要が主張されるようになったのは近代としつつも、この3時代と近代の関係について考察されず、保険を近代の制度、歴史的産物とする視点に弱い。もっとも、わずか5頁の考察であるから、大した考察は不可能である。

第5章「保険価値論」は、保険の個人的・社会的な倫理的価値を考察する。これは、従来の考察が経済的効果に注目していたのに対して、精神的、倫理的価値などにも配慮すべきとするものである。個人的価値、社会的価値、国家的価値に分けて考察するが、経済生活の安定策、信用向上策などの指摘は、保険の経済効果と変わらないのではないか。

第6章「保険に関する学説」は、保険学説の考察を行なう。損害契約説、損害分担説、危険転嫁説、生命保険否認説、統一不能説、偶発的欲望充足説、経済生活確保説が取り上げられるが、わずか4頁の考察である。

以上で第1編の考察が終わり、第2編「経営論」となる。第2編第1章「経営形態—相互会社—営業保険」は、保険団体を構成する方法による分類「相互保険組織」、「営業保険組織」に基づき考察する。前者を直接的な団結、後者を間接的な団結とし、「直接結合」という用語はないが「間接結合」という用語があるので、「直接結合」、「間接結合」という考え方をしていると思われる。

第2章「経営主義」は、経営するにあたっての事業方針の考察である。営利主義と非営利主義、公営主義と民営主義、自由主義と強制主義に分けて考察する。非営利主義の経営目的を公益とするが、非営利＝公益とはできないのではないか。「本来保険事業は共同救援の精神に基づくものであるから之が経営は非営利主義によるのが最も適切と謂わねばならぬ」（同p.66）としているのが注目される。

第3章「経営の基礎（保険数理学一斑）」は、保険数理も含めながら、保険料、保険料の支払い方式などについて考察する。保険数理に関しては、死亡生残表、予定利率、責任準備金、保険料積立金などについて考察する。

第4章「保険資産の計理と運用（保険財務学一斑）」は、計理と運用に関する一般知識を考察する。資産の経理ならびに運用業務は、保険事業の生活安定的

意義と相互扶助の使命が宣伝されたため金融事業の方面が見過ごされ、付随的業務とみなされてきたとする。今日の保険金融論といえるが、経理とのセットと考えていること、相互扶助使命を強調して付随的業務としているのが注目される。また、保険資産運用原則として、確実性、分散性、有利性、適応性、還元性、永続性、公共性をあげているのも注目される。そして何より、61頁にもわたる考察をしていることが注目される。数少ない保険金融論の考察といえよう。

第5章「保険事業の統制並に監督（保険法学一斑）」は、保険に対する規制について考察する。保険法は、保険公法と保険私法に大別される。

第6章「保険技術」は、技術的知識としての危険選択および事業管理について考察する。保険は倫理的規範の学問として研究されるべきであるが、経営上各種の専門技術の応用に俟たねばならぬとする。危険選択については、「保険学一斑」として、生命保険に限定した考察となっている。事業管理については、保険会社の組織図を使った考察がなされるが、これも生命保険に限定した考察となっている。

第7章「特殊保険」は、一般に行われる「普通保険」に対して特殊な保険について考察する。保険制度は単なる相互扶助組織であるばかりでなく、国家的ないしは社会的に各種の政策を加味して実施されるようになったとして、社会政策としての簡易保険、健康保険、産業政策としての家畜保険、森林保険、交通保険としての航空保険を特殊保険として例示する。個別の保険としては、簡易生命保険、郵便年金、小児保険、健康保険、弱体保険、団体保険、家畜保険、森林保険、自動車保険、航空保険が取り上げられる。今日では主たる損害保険種目である自動車保険が、特殊保険として取り上げられているのが注目される。なお、本章で第2編の考察が終わるが、末尾に保険経営に関する参考書として、次の文献が紹介されている（同p.246）。

三浦義道『保険事業論』

粟津清亮『改訂保険学要綱』

三浦義道『保険法論』

村上隆吉『簡易生命保険事業論』

森莊三郎『社会保険概論』
熊谷憲一『健康保険法詳解』
高山圭三『火災保険及其経営』
篠原昌治『通俗生命保険医学』
深萱宗助『信用及担保貸付論』
小川鐵堂『投資物の比較研究』
太田哲三『貸借対照表作り方と見方』
太田坦士郎『公社債放資の研究』

保険学を総合科学とするだけに保険医学の本がみられたり、保険金融に関わる本も複数含まれているのが注目される。

第3編「政策論」第1章「保険国营是非論」は、保険事業の経営は国营組織、民営組織いずれをもってするか議論について考察する。保険制度発達の初期は国家が保険思想啓発の目的で着手し、中世では君主が国庫収入を得るために保険を利用し、近世では自由主義的経済思想の影響を受けて民営保険が原則であるとされるようになったが、最近になって事業の性質上社会公共の福祉に影響するところ多大であるという理由から、国营保険が主張されるようになったとする。

第2章「保険業者の福祉運動と精神運動」は、保険業者の防火運動、保険運動などについて考察する。精神的より物質的へ、さらにまた精神的へという歴史的過程は、あらゆる事象を通じる帰趨であり、保険についても見受けられるとする。そのような精神的なものへという現象として、保険会社の組織的運動などを取り上げる。

第3章「新種保険と数理的根拠（再保険の必要）」は、新種保険に言及しつつ再保険について考察する。新種保険に言及するが、保険数理の不安定性などとの関連から再保険に結びつけた議論ではなく、両者の結びつきがあまりない考察である。したがって、今一つ本章の意図が理解できなかった。

第4章「保険資金の経済界に於ける重要性」は、保険資金の増大を背景とした国民経済における保険金融の重要性について考察する。量的に銀行には及ばないものの、資金蓄積の成長率は銀行を上回るとする。銀行、信託会社との比

較も交えた保険金融についての考察である。

第5章「保険と貨幣価値下落の問題」は、第1次世界大戦後のインフレの影響を意識して、貨幣価値下落の影響について考察する。準備金の蓄積と分散投資が対策として強調されているのが注目される。

第6章「保険の募集政策を論ず」は、募集戦といえるほどの熾烈さを極める募集の弊害が少なくないので、それに対する政策について考察する。

第7章「保険事業の将来」は、最終章として保険事業の将来を展望する。しかし、中身はなぜ過去50年近くわが国の保険が発展を遂げたかを考察しており、将来の楽観的な見方が紹介されるが、展望は提示されていない。発展の第1の要因を保険思想の普及としているのが注目される。

相互扶助が基本とされていること、保険金融がかなり大きく取り上げられていること、独立した政策論があることなどが本書の特徴といえよう。

(6) 末高信[1932], 『私経済保険学』明善社。

本書は、大学の参考書として位置づけられるが、617頁にも及ぶ大著である。第1編「総論」、第2編「生命保険」、第3編「火災保険」、第4編「海上保険」、第5編「雑種保険」で構成されており、第1編保険総論、第2編以下保険各論という構成といえる。保険総論、保険各論が1冊に収められているため大著となったのであろう。

第1編「総論」第1章「保険の概念」は、保険の意義と限界を考察し、保険の本質に迫るが、保険類似制度、保険の分類、保険の効果などのパターン化された考察も含まれ、さらに保険学について言及する。保険学説を紹介、検討した上で、保険の本質を明らかにするための保険の要素を考察する。その際重要な点は、保険が契約であるか施設であるか、保険の職能、保険の手段であり、保険を経済生活保全のために共通準備財産を形成する施設とする。次に、保険類似制度について考察するが、保険類似の行為、施設に分けた考察となっており、類似行為として、貯蓄、保証、賭博、慈善、自家保険、類似施設として救済組合をあげる。保険の限界については、経済生活が一定の程度以上の段階にいること、危険の性質による限界としており、経済的限界と技術的限界の観点から

考えているといえよう。続いて、保険の分類について考察する。その分類は、表5のとおりである。

表5. 末高 [1932] における保険の分類

分類規準	分類
わが国の商法採用 ドイツ保険契約法採用 アメリカ各州の保険法採用 スイス保険法採用 保険の目的物の存在場所 保険の行われる経済階級 保険の目的物 保険経営の主体 経営上の独占性 経営の指導精神 保険事故 加入の自由 保険金給付の基準 保険事故の数	生命保険と損害保険 損害保険、生命保険、傷害保険 生命保険、火災海上保険、災害保険 損害保険と人保険 陸上保険と海上保険 私経済保険と社会保険 人保険と財産保険 公営保険と民営保険 独占的経営の保険と競争的経営の保険 (営利保険と非営利保険) 生命保険、傷害保険、火災保険、海上保険など 強制保険と任意保険 損害保険と定額保険 (単一保険と混合保険)

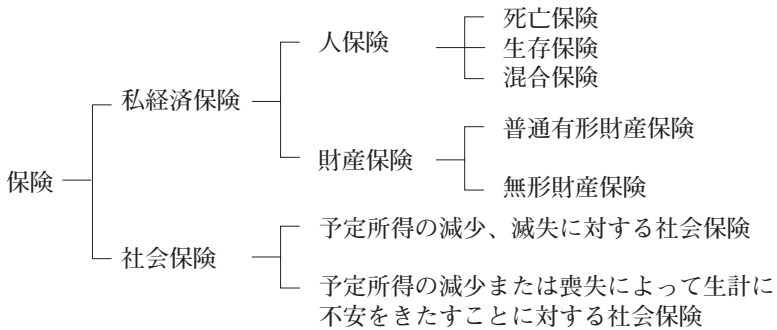
(出所) 末高[1932]pp.33-41の論述から、筆者が作成。

注) 営利保険と非営利保険という名称が使用されていないが、内容から判断して筆者が使用したため括弧書きとしている。他の括弧書きも同様である。

保険経営の主体を基準とする分類で公営保険、民営保険に分類しつつ、細分類として民有にして公営なるもの、半公有なるものを指摘し、また、経営の指導精神を基準とする分類で営利か否かが重要なので公営、私営の分類に類似するが両者は一致するとは限らず、公営にして営利を目的とするもの(イタリアの1913年以後の生命保険)、民営にして営利を目的としないもの(相互組織保険)について指摘しているのが注目される(同p.39)。

以上の保険の分類の考察をしたのち、保険を体系的に把握するために保険の分類を生かしつつ図2のような把握をする。

図2. 末高 [1932] による保険の体系的把握



(出所) 末高[1922]pp.42-51の論述から、筆者が作成。

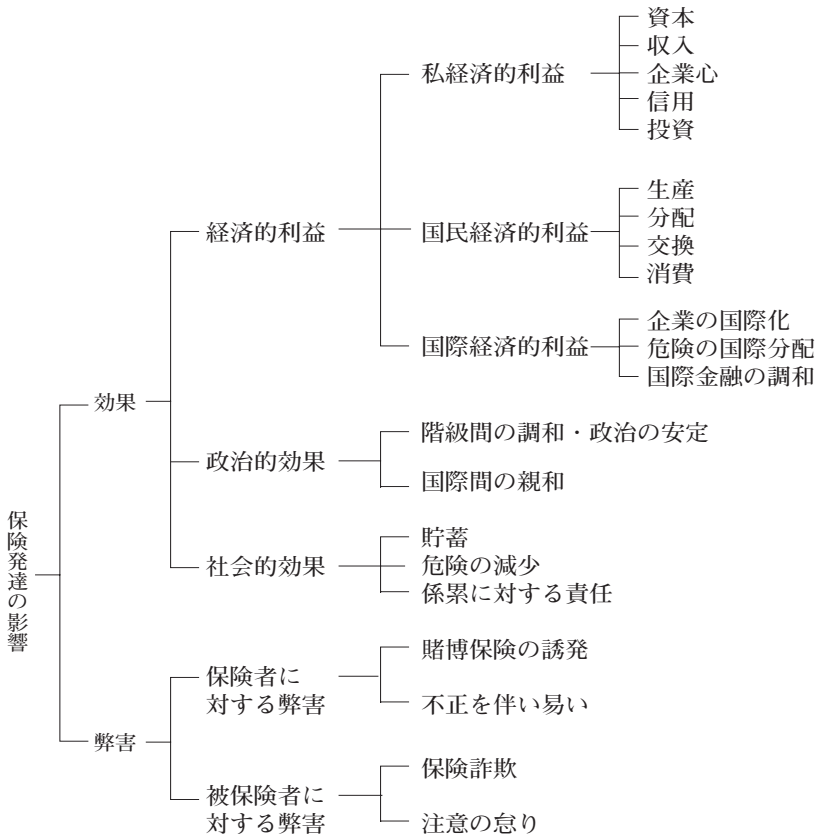
今日の考察においても、ただ単に考える分類基準を示すのみの考察が多いが、それはそれで意義があるものの、究極的な目的は現代保険を把握するためにそれをどう生かすかであって、末高 [1932] はこのような思考の先駆的形態といえよう。

保険の影響として保険の効果のみならず、弊害についても図3のとおり、包括的に考察している。

最後に保険学についても考察する。ドイツの総合保険学を社会科学的部門と自然科学的部門の混和に終わり、科学的方法論の立場からは科学といえないとしつつ、保険経済学を重視する (同p.64)。

第2章「保険の発達」は、保険史の考察である。前史 (古代・中世) —合理的料率を基礎としない相互救済の一手段、本史—保険形成時代 (14世紀—17世紀)、保険完成時代 (18世紀—19世紀前半)、保険普及時代 (19世紀後半以降) に時代区分する。近代保険の成立に関し、海上保険は1700年頃合理的な料率のもとに海上保険業が経営され、1720年のロイヤル・エクスチェンジ、ロンドン・アシュアランスの設立で営利主義的海上保険の完成を見たとし、1666年のロンドン大火後近代的営利火災保険の完成、生命保険は1700年前後の生命保険会社設立、死亡表の作成などを背景として近代生命保険が成立したとする (同 pp.85-86)。

図3. 末高 [1932] における保険の影響 (効果・弊害)



(出所) 末高 [1932] pp.51-60 を参照して、筆者作成。

第3章「保険の経営」は、保険企業形態、保険経営の技術について考察する。保険企業形態は、大きく公営保険、私営保険に分けて考察する。公営保険を営利保険、相互保険、狭義の公営保険に細分類する。営利保険は一見矛盾するが、資力の乏しい階級の生活保障としての私営保険を公営保険としての営利保険とする。相互保険も本来私営保険の一形態であるが、資力に乏しい階級に対して強制で一部国家の拠出が行われているものは公営保険の一経営形態とする。し

かし、これは経営形態というよりも私営保険に公営保険が提唱するような性格の保険があるとすべきであろう。保険企業の設立、運営、組織全般にわたって、再保険なども含めて幅広い考察がなされる。

第4章「保険政策」は、国家が保険および保険事業に直接影響を与えることを目的とするすべての手段について考察する。保険の果たす保障機能は国家の職能の一部なので、保険の発達をはかるのは、国家の職責とする。国家の保険監督方法を公示主義、準拠主義、実質監督主義に分けて、イギリスを除く各国が実質監督主義によるとする。

以上が第1編の考察で、保険総論に相当しよう。前述のとおり、第2編から保険各論に入る。総論、各論とも歴史的な面を含めて主要国の状況もカバーされている点で大変充実しており、また、各論の切り口も生命保険、損害保険とせずに、火災保険、海上保険、雑種保険として網羅的にカバーしているために、大著となっている。ただし、各論において公的保険もしくは社会保険を取り上げていないのが注目される。総論で公営保険としてそれなりに考察をしており、なんといっても本書は「私経済保険学」なので外したのかもしれないが、気になるところである。なお、本書は、保険の分類、保険の機能・効果の有力な先行研究といえよう。

(7) 酒井正三郎[1934], 『保険経営学』 森山書店。

本書は、商業学に対する危機意識に基づいていることが特徴である。すなわち、学問としての最低限の要請である組織的知識体系という要請すら商業学が達成しておらず、特に特殊商業学においては、「問題が常にその特殊の形態においてのみ考察せられて、全体的関係において広く事物を考察するという態度と努力が失われていること、これである。しかるに、このことは問題の一般性についての理解を放棄することのみならず、その個性性についての明確な把握すらをさまたげる。けだし、普遍的認識の地盤の上のみ、真の個別的認識が可能だからである」(酒井[1934]序文pp.i-ii)とする。戦後しばしば見られた、保険学の一般性と特殊性の問題を考えるにあたって必要な基本認識が凝縮されているといっても過言でないほどの優れた指摘である。

本書は、第1編「総論」、第2編「保険組織論」、第3編「海上保険交通論」で構成され、海上保険を基本とした考察がなされる。

第1編「総論」第1章「経営学としての海上保険学」は、海上保険学という学問について考察する。商業資本主義段階では、営利を前提とした商業学が重要であり、交通、取引の問題が重視されたとする。そこでは、外国貿易に関わり保険証券の形式ならびに法律知識、保険料の知識などが求められ、海上保険契約論として発達したが、産業革命後は経営、組織の問題も重要となり、経営学が重要となってきた。保険においても、従来から発達している保険契約論の他に保険組織論が必要とされ、それらによって構成される保険経営学が重要になってきたとする。

第2章「海上保険の基本観念」は、海上保険の概念について考察する。著者は、一般性と特殊性の関係を重視し、本章ではまず一般論としての保険の本質を考察してから、特殊な海上保険へと考察を進める。従来損害填補の契約と定義されることが多かったが、契約の集合体として、組織として眺める傾向が強くなってきた。これら二面の総合的考察が必要であるとする。保険を保険者を中心とする経済機構と見ないで被保険者の構成する社会的な仕組とみた点において優れているマーネスの保険本質論を評価しつつも、保険の欲求が利己的個人的欲求によらずして相互的個人的欲求によるもの誤解をもたらす恐れがある点を批判して、自らは「多数経済の間接的・内部的金融の仕組」とする。保険の本質は保険団体に拠出された共通準備財産から欲求の充当を受けることとし、この仕組みが内部的金融の仕組とする。この点において、保険本質論としては共通準備財産説に近いといえるが、財産の形成自体ではなくそこからの取り崩し・資金の流れの仕組みを重視している点で内部的金融説とすべきか。このように保険の本質に関する一般論を展開した上で、海上保険を次のように定義する。

海上保険とは海上の危険に脅かされる海上企業関係者の生活安定を目的とする間接的・内部的金融の仕組みである。(同p.21)

なお、偶然性についても言及しており、生命保険によって偶然的要素の保険に占める重要性が減じつつあるとし、この傾向を「保険の貯蓄化」とする。

第3章「海上保険の沿革」は、海上保険史の考察である。発生の時期、場所、起源が問題であるとする。起源の問題として、共同海損説と海上貸借学説の二者があるが後者が妥当であるとし、海上貸借が中世教会の高利取締法に抵触し、保険貸借となり、これが進化して保険契約になったとする。その時期は発見されている保険証券から推測して14世紀後半、場所はイタリーとする。しかし、これは保険契約の成立であり、合理的保険料率が発見されて、収入価額と支払価額との均衡が得られるようになるのは18世紀イギリスとする。具体的には、1720年設立のロンドン・アシュアランス・コーポレーションとロイヤル・エクスチェンジ・アシュアランス・コーポレーションをもって近世保険企業の基礎が確立したとする。

第2編「保険組織論」第4章「保険事業概論」は、本編の主題について説明する。経営形態は、企業形態、家計形態、財政形態、協同形態のいずれかであるが、経営学の対象としては企業形態とすべきとする。

第5章「海上保険の企業形態と会社支配形態」は、企業形態＝資本組織の究明を試みる。企業形態を個人企業形態、組合企業形態、会社企業形態に分けて考察する。

第6章「海上保険会社の経営組織と経営原則」は、本店の経営組織支店および代理店の統制組織、経営原則について考察する。経営原則については、受動的業務に関して、保険料率合理化の原則、危険同質化の原則、能動的業務に関して資本運用多様化の原則を取り上げる。保険会社の業務を本来的業務としての保障業務と付随的業務の資金運用業務に分けたとき、前者を受動的業務、後者を能動的業務としているのが興味深い。また、能動的業務に関する考察は、保険金融論といえる。なお、最後に事業収益論として利益の源泉に関わる考察をしている。

第7章「海上保険会社の批判と統制」は、業績を図る方法と保険行政について考察する。後者については、公示主義、準則主義、実質的監督主義に分けて考察する。

第3編「海上保険交通論」第8章「海上保険契約概論」は、海上保険契約の概要が示され、その構成要件として、被保険利益、保険事故、保険期間を指摘する。

第9章「被保険利益論」は、保険価額、保険金額などの用語から始まり、各種保険や再保険、告知義務、担保責任などを考察する。

第10章「海上危険論」は、海上危険について考察する。危険を「偶然的な出来事」(同p.115)とし、偶然的とは、必然的でないこと、故意的でないことを意味するとする。いわゆる絶対的偶然性、相対的偶然性という分け方からすれば、前者を想定しているといえ、生命保険が除外されることになる。また、確率論的にいえば、偶然的とは必然的(確率1)でないばかりではなく、不可能(確率0)であってもならない。こうした点を考えると、著者の重視する一般から特殊の展開において、危険一般の規定にかなり問題があるといわざるを得ない。また、海上危険＝航海に関する事故とするが、このように考えるならば、ここで言う危険はペリル(peril)となろう。もっとも、第8章で提示した海上保険契約の構成要件を第9章以下でそれぞれ考察するという流れになっているので、本章は「保険事故」に関する考察となり、ペリルの考察となるのは当然である。ただし、実際「海固有の危険(Perils of the Sea)」、「海上に於ける凡ゆる危険(Perils on the Sea)」(同p.116)などの記述も見られるが、「海上危険」という語をば、海上事業に損害をもたらすべき関係の可能性と解するを正当と信ずる」(同p.117)としており、この場合は「可能性」としていることからリスク(risk)と捉えることとなり、危険という用語についてやや混乱していると思われる。

第11章「海損填補論」は、保険契約の構成要件として指摘した「保険期間」を考察する。そうであるならば、本来「保険期間論」とすべきであるが、保険期間は保険者の責任存続期間でその間に起こった海損について保険者に責任が発生するのであるから、海損を同時に扱うのが合目的であるので、「海損填補論」とする。

以上が本書の内容であるが、この後に附録Ⅰ「船舶保険普通約款」、附録Ⅱ「積荷保険普通約款」、附録Ⅲ「文献解説」が続く。「文献解説」は大変充実し

ており、本書を貫く一般性と特殊性との関係を考えるにあたっても有益である。先に引用したとおり、本書は一般性と特殊性に対する鋭い洞察に基づくといえるが、各章でそれがどのように生かされているのかがあまり理解できない。海上保険は保険の原基形態といえるので、一般性と特殊性の考察に適した題材とも言えるが、この点に関して著者がどう考えているかもわからない。

(8) 三浦義道[1935], 『保険学』改訂11版, 巖松堂(初版は1924年)。

本書は、保険の総合的研究を目的とする保険学の書であり、栗津[1921]に負うところが大きいとする(三浦[1924]序)。

第1章「緒論」は、保険学の意義、目的、特質など保険学について考察する。「保険学は保険制度の本質を闡明し、此の制度の運用に関する理論を攻究する科学である」(三浦[1935]p.1)とする。保険学の摂取すべき分化的知識は、経済学の他に法律学的・統計学的・数学的・医学的・工学的知識などで、これらを総合する独立的総合科学であるとする。保険制度は本来経済制度であるから、保険学は経済学、広義の経済学の一部であるとする。なお、保険は経済生活における防衛性の行為として利用されるので、純利得性に乏しい相互救済の趣旨による団体的保障行為としているのが注目される。相互扶助性、団体形成を重視する特徴を有する。もちろん、これは栗津と同じ立場ということである。

第2章「保険本質論」は、保険類似制度、保険可能の範囲の考察を含み、保険の本質について考察する。人の経済生活は経済的需要の充足の連鎖であるとし、保険制度は経済上生産、消費、交換いずれでもなく、特殊の需要である保障需要充足の一つの方法とする。保険の本質は、偶然的経済需要の充足を目的とする相互的保障に存するとする。保険類似制度としては、貯蓄、個人的保証、自家保険、慈善、賭博・富籤、頼母子講・無尽、終身定期金契約、共済組合を取り上げる。続いて保険学説を考察するが、そこにおいて、現代保険と原始的保険を合理的料率の算出によって分けることに対して、偶然率の制度という漠然としたものを判断基準とするのは困難であるとして、批判しているのが注目される。保険学説としては、需要説を支持する。そして、偶然率を重視しながら、保険可能の範囲について考察する。

第3章「保険形態論」は、前章で考察した本質を持つ保険が、いかなる形態で現れるかを考察する。相互保険と営利保険では、相互組織と株式組織が比較検討され、両者の接近が指摘される。国立保険と私立保険では、さまざまな国の国立保険と個人、組合、会社形態の私立保険について考察する。続いて、保険の種類について考察する。損害保険と定額保険という分類を取り上げるが、物(的)保険と人(的)保険が比較的便宜とし、この分類に基づいて網羅的にさまざまな保険について考察する。ここで、主たる保険について、簡単ではあるが、歴史的考察がなされる。

第4章「保険技術論」は、「生命保険の技術論の理解は損害保険の技術を理解するの根底である」(同p.206)として、生命保険技術の考察を行なう。保険技術として重要なものは、保険料の計算(通常生命保険は長期の契約となるので保険料の計算には金利上の割引計算を含む)、準備金の計算、選択の技術であるとして、それぞれについて考察する。特に、保険数理について、かなり詳しく考察する。

第5章「保険経営の基調(保険制度運用の基礎理論)」は、保険事業経営の基礎理論を考察する。基礎理論ではあるが、文化との関係も論じられる。

保険学説、保険の種類・分類、保険可能の範囲は、パターン化している考察といえよう。また、保険の本質を重視し、個々の保険学説の考察を行いながら、自らは需要説の立場に立つ。保険の本質を重視し、相互保障としている。保険制度全般に共通する理論を論じる保険総論の位置づけで執筆されたと思われるが、第3、4章は生命保険に偏っているものの保険各論としても読める章といえ、この点で保険総論+保険各論の構成といえるだろう。本文が340頁と充実しているが、保険史の考察があまりなされていない。しかも、原始的保険、現代保険の比較において、両者の違いを合理的保険料に求めることを否定するだけに、保険史の方法論的な点も含めてもっと論じてほしかった。

(9) 磯野正登[1937], 『保険学総論』 保険経済社。

保険学の目的を保険制度の本質の解明とその運用に関する知識の講究とする。その目的を達成するためには、経済学、法律学、統計学はもとより医学やその

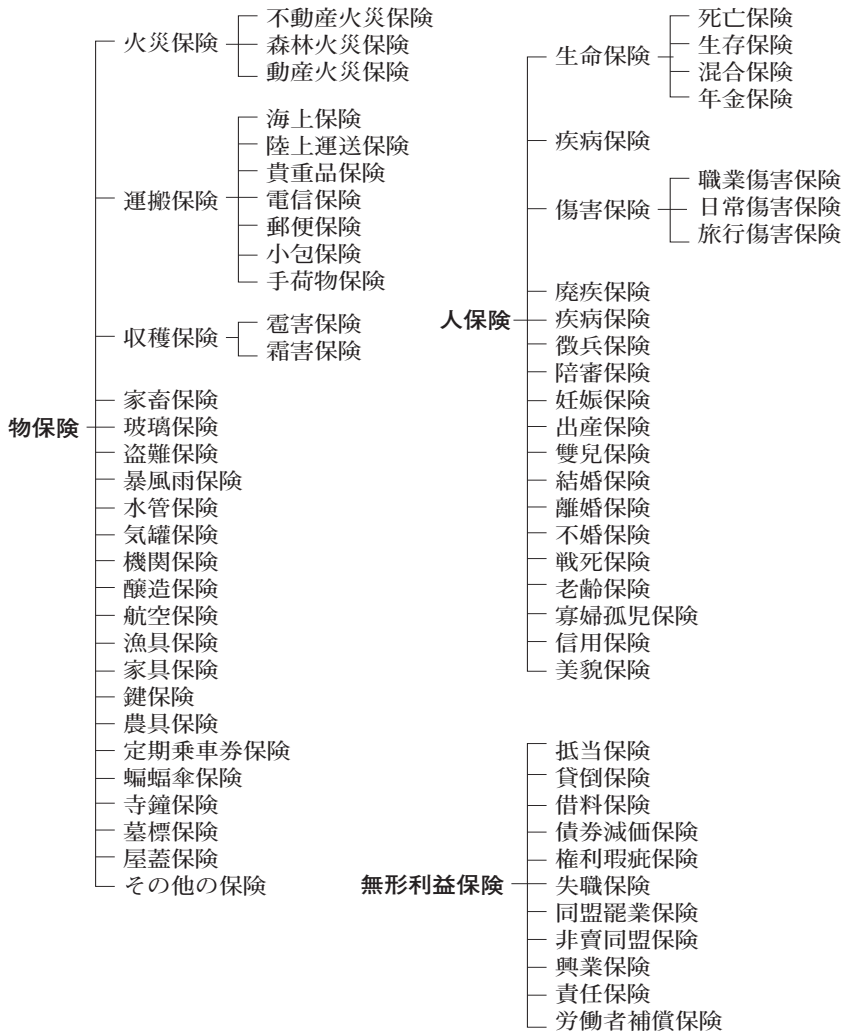
他の自然科学の知識を必要とするので、保険学はこれら諸科学内における保険に必要な部分の総合的研究となるとする。保険学を独立した科学とできないとする見解もあるが、さまざまな科学と密接な関係を有しても認識対象が保険制度の研究に統一される以上、保険学を独立した一科学とできるとする。そして、保険学の研究は関係的知識の融合が重要であるが、保険制度の根本を究めようとすれば、まず法学的知識が先決問題となるので、本書の大部分は法学的知識によるとする。

第1章「保険の沿革」は、保険の起源を考察し、保険の意義、特徴を導き出す。保険の起源を冒険貸借、ギルドとし、少数の団員の損害を多数の団員に分担している制度といえるので、保険を相互扶助とする。そして、現代的保険の特徴として、強固な企業により営まれる、保険料は蓋然率に基づく合理的で公平な計算による、国家の監督は厳重である、をあげる。

第2章「保険の種類」は、保険の分類を考察する。その基準を保険の目的（保険の対象）にすべきとし、物保険、人保険、無形利益の保険に分ける。図4のように多くの保険を列挙するが、それぞれの保険に関する説明はほとんどない。また、元受保険と再保険、現行商法上の区分についても考察するが、さまざまな基準により保険を分類するのではなく、体系的思考から分類を行っているといえよう。

第3章「保険の本質」は、保険学説を考察したのち、類似制度との比較を行い、さらに保険可能の範囲を探る。類似制度との比較、可能範囲の考察いずれも保険の本質を究めるための考察としていることが注目される。保険学説は20以上あり、その中心は損害保険と生命保険の統一の説明にあるとする。これらの学説のうち重要なものとして、損害説、生命保険否認説、技術説、不利益説、統一不能説、所得構成説、共通準備財産説、需要説を取り上げ、需要説を支持する。類似制度との比較では、賭博、保証、貯蓄、奇捨、自家保険を取り上げる。保険可能の範囲の考察においては、保険事故発生の蓋然率が算出できることが保険が実行されるための前提条件としつつ、その前提条件が充足されても次のような危険は保険実行が困難または不可能とする。過大危険、過小危険、大衆の感知欠乏、稀有危険、道徳的危険の過大、数学的危険である。

図4. 磯野[1937]における保険の分類



(出所) 磯野[1937]pp.15-28の論述から，筆者が作成。

第4章「保険の利弊」は、保険の利益、弊害を考察する。利益として、知識および道徳の向上、貯蓄と勤勉の奨励、国際協力の思想の滋養、個人の信用の増大、財界に対する貢献、事故発生防止運動の発達をあげる。弊害は、保険者側の弊害として、賭博的行為の誘発、共同資産の悪用、悪経営、加入者側の弊害として、道徳的危険をあげる。

第5章「保険の契約」は、保険契約について考察する。保険契約を一樹木とすればそれが集まった保険制度は森に相当するとする。前述の通り、本書は主として法学的知識によるとしているが、4章までの考察はあまり法学的知識によらない。本章は判例なども取り上げられ、法学的知識によるが、保険料について保険原理の核心を突く、次のような重要な考察もなされる。

保険料をP、保険事故発生の蓋然率をw、保険金をZとして、下記式を考える。

$$P = wZ$$

この式は保険者と保険契約者の数学的期待値が均等であることを示し、これをドイツの学者は「給付反対給付均等の原則」(Prinzip der Gleichheit von Leistung und Gegenleistung)と呼ぶとしている(同p.85)。しかし、これは不正確な表現で正しくは、「給付反対給付の数学的期待値均等の原則」とすべきとする。さらに、総額ベースで把握すべきとする者がいるが、もしそうであるならば、下記のような式にしなければならないとする。

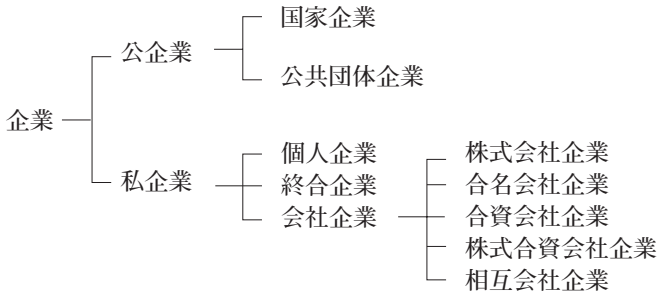
$$\sum P = \sum wZ$$

磯野[1937]は「等価交換」という用語を使用していないが、期待値との一種の等価交換がなされているという個別の取引の次元でレクシスの原理を把握しているといえ、レクシスの原理を総額ベースで把握するという誤解が多い中で、例外的な存在といえる。ただし、「給付」と「反対給付」の使い方が今日とは逆なので、磯野[1937]の表現を今日風に言い換えれば、「給付の数学的期待値と反対給付均等の原則」となろう。

第6章「保険契約の内容」は、保険契約に伴う権利義務について考察する。商法、普通保険約款などを取り上げた考察であるが、約款は資料という面が強い。保険法学的考察であると同時に、保険各論的考察となっている。

第7章「保険企業形態」は、保険企業の所有者を基準とした図5のような企業

図5. 磯野[1937]における保険の企業形態



(出所) 磯野[1937]p.466の図。

形態の分類に基づき、保険企業を考察する。

法学的知識を土台とするというよりも、第4章までは保険総論的な内容で必ずしも法学的知識によらず、第5、6章は保険法学的な保険各論といえよう。保険各論のみ法学的色彩が濃くなるという点に本書の特徴があるといえよう。また、本書執筆の理由の一つに、これまでの書物が初学者に難解であったことをあげる(同自序p.1)。そのため、もっぱら实际的知識を重んじ、理論的説明を最小限度に留めたとするが、著者のいう实际的知識とは判例、約款などと思われ、法学的勉強をしていない初学者にはかえって難解になっているばかりでなく、本書自体が類書に比較してわかり易い書物とは思えない。なお、保険の二大原則的な考察がなされている点に、大いに注目すべきである。さらに、専門用語に外国語を併記する文献が多いが、その場合はほとんどがドイツ語であるのに対して、本書が英語であるのも注目される。

(10) 勝呂弘[1939], 『保険学』叢文閣。

本書は、保険学講義の教材を基本として執筆されているが、入用充足説に基づきながら考察する。第1編「総論」、第2編「各論」で構成され、保険総論と保険各論による。

第1編「総論」第1章「保険の概念」は、保険の本質、可能範囲、類似制度に

ついて考察する。不時の入用をもたらす危険への対策が必要と認識されるようになると貯蓄が行われたが、それが不経済であることがわかると相互的充足準備の方法がとられ、確率を応用した公平な分担や営利心に刺激されて、さまざまな技術的困難を克服し、合理的な経済制度として生成したのが保険であるとする(同p.12)。保険の生成の視点から保険をこのように捉えて上で、保険の本質の考察を行なう。保険学説を取り上げ保険学説史上ワグナー(Adolf Wagner)の「損害填補説」が画期的であるとするが、その後諸説に分かれ、いくつかの説を批判的に検討した上でゴビ(Ulisse Gobbi)の「偶発的欲望説」も画期的であるとする。その理由は、「欲望」という観念にまで遡ることによって、保険学の研究を一般経済学の研究と同一の出発点に置き得たことになるからとする。いわば、保険学における一般性の点から高く評価しているといえる。この学説の「欲望」を「入用」に改め、高めたのがマーネスであり、これを保険学説史上の進歩とする。それは、「欲望」に関する理論体系を樹立することは国民経済学においても容易に成就し得ない難問であるから、特殊経済学たる保険学においてこれを問題とすることは不適當であるという正当な理由に基づいているからであるとする。さらに、ヴェルネル(Gerhard Wöner)、志田の定義を考察し、自らは次のように定義する。

保険とは、偶発的入用を予見し、之を相互的に充足せしむる目的を以て多数人団結し、各自公平なる分担に任ずる経済制度を謂う。(同p.30)

この定義に基づき、保険の要件を次の5つとする。

1. 偶発的入用の原因たる一定の危険
2. 偶発的入用の予見
3. 偶発的入用の相互的充足を目的とする多数人の団結
4. 団結した各自(各加入者)が所期の目的を達成するために為す公平なる分担
5. 経済制度

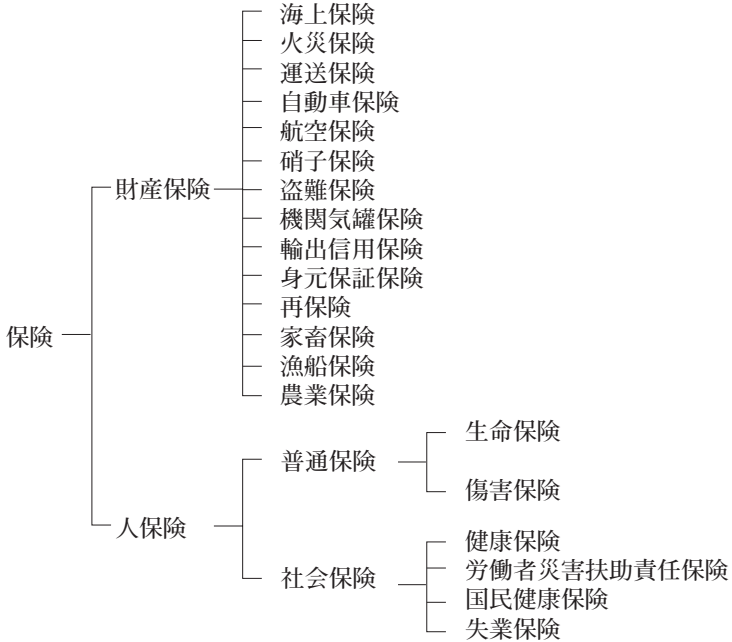
続いて、各要件ごとに考察を深める。特に3に関連して、相互主義に基づき保険団体が形成されるとし、結成方法に直接結成の方法と間接結成の方法の2つがあるが、たとえ後者でも構成員が自覚しているかいないかを問わず偶発的入用を相互的に充足する仕組みをもって構成員を糾合しているのであるから、相互主義が貫徹するとしていることが注目される(同pp.41-42)。また、4に関して、 $P = \omega Z$ (P 分担額の総和、 ω 蓋然率、 Z 予見した偶発的入用の総和)を「給付反対給付平準の法則」または「収支均等の原則」としており、これまでの考察で示唆されていたが、当時はまだレクシスの原理に対する正しい理解ができていなかったことがわかる。

保険可能の範囲については、保険可能の前提、経済的制限、技術的制限を考察する。また、保険類似制度については、予防ないし防止施設、自家保険、貯蓄、保証、無人(または頼母子)、共済組合、恩給制度、射倖契約をあげる。予防を入れているのは、小島[1929]と同じ誤りをしている。

いくつかの文献でみられたのと同様に、保険本質論と保険可能の範囲と類似制度の考察が一つの章で行われている。保険の本質を見極めるための考察として、保険可能の範囲、保険類似制度の考察が位置づけられていると思われる。

第2章「保険の分類」は、本質上の観点からの分類、商法の分類、第2編各論を展開する際の分類について考察する。本質上の観点からの分類法は、「危険」による分類、「入用充足」の方法による分類、「多数人の結合」による分類、「公平なる分担」による分類、「経済制度」上よりの分類とする。商法の分類は生命保険、損害保険で理論的に問題のある分類とし、現実の処理への言及もなされる。第2編各論に向けた分類方法は、危険の客体による分類(財産保険、人保険)→危険自体の種類により細別というもので、図6のとおりである。

図6. 勝呂[1939]による保険各論に向けた保険の分類



(出所) 勝呂[1939]pp98-100の図。

第3章「保険の発達」は、保険史の考察である。海上保険成立にはじまる歴史を保険の本史とし、それ以前の保険と若干の思想的連鎖を保つ古代、中世の各種制度に関する歴史を保険前史とする。保険本史を第1期14世紀中葉から17世紀中葉の保険契約が整頓される保険の形成時代、第2期17世紀末葉より19世紀初葉の保険会社が相次いで設立される保険会社勃興時代、第3期19世紀中葉より現代に及ぶ社会保険の出現、協同組合保険の台頭、保険国際化の傾向、保険の大経営化等の保険拡張時代に分ける。第1期の考察において、海上保険を商人的打算の結果生じたのに対して火災保険をゲルマン系の素地より発育し、共益的見地より形成され、現代的保険になるにおいて営利心が大いなる刺激を

与えたとしているのが注目される（同pp.116-118）。第2期の保険会社成立をもって現代的保険の成立とする。海上保険は1720年The Royal Exchange Assurance Corporation, The London Assurance Corporation, 火災保険は1680年Fire Insurance Office, 生命保険は1762年The Society for the Equitable Assurance on Lives and Survivorships（ただし相互組合組織）とする。第3期については、前述の特徴それぞれについて考察する。続いてわが国の保険史を考察する。わが国保険史は、第1期創業時代（創業前後から日清戦争まで）、第2期保険会社の濫設とその整理時代（日清戦争より日露戦争まで）、第3期第1次躍進時代（日露戦争より世界大戦前まで）、第4期第2次躍進時代（世界大戦より関東大震災まで）、第5期第3次躍進時代（震災後より現今まで）の5期に分けられる。

第4章「保険事業の構成」は、保険事業の主体として保険企業形態、客体として保険契約者・被保険者等、保険事業の補助機関を考察する。

以上で総論が終わり、各論は、前述のとおり、図6の保険の分類に基づき各種保険を考察する。

参考文献の充実、保険法学の位置づけなどの違いはあるが、かなり磯野[1937]と同様な構成となっている。

(11) 近藤文二[1940], 『保険学総論』有光社。

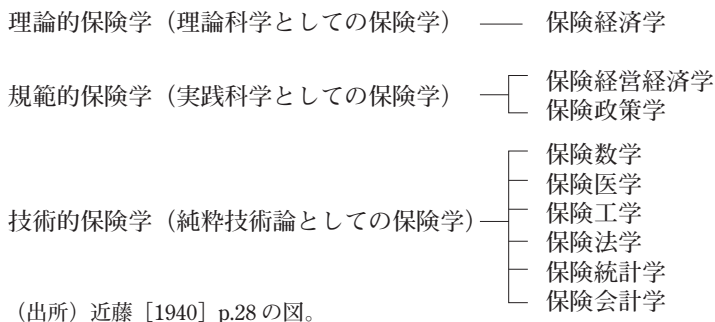
本書は保険総論としての入門書であるとしつつも、単に保険に関する経済、法律、技術その他一切に亘る網羅的な叙述に終始する従来の保険総論に対して、保険の経済学的研究を行うとする。

第1編「序論」第1章「保険学の本質」は、保険学総論の性格や課題を明らかにするために、保険学の本質を明らかにする。保険の実際のないし技術的研究は古く、保険とともに発生したといえ、海上保険に関する法律論的研究が16世紀中葉に見られ、17世紀には生命保険の基礎となるべき数理、統計的研究が行われたが、一つの学問としてまとまった姿を見せたのは19世紀イギリスで、1848年ロンドンにアクチュアリー協会が設立されたとする。アクチュアリー学は経営学的要素を取り入れて、当初の応用数学の域を脱するが、生命保険論の

域を脱することなく、英米における保険研究は保険各論以上に出るものではなかった。これに対して、総論的な保険学が登場したのがドイツであるので、ドイツ流の保険学を取り上げる。

第2章「保険学総論の問題と体系」は、マーネス、シュミット (Schmid)、ワーゲンフュール (Wagenführ) の見解を取り上げた後に、著者独自の保険学の体系を図7のように示す。

図7. 近藤[1940]における保険に関する学問



また、保険学総論は次のような体系と問題をもって展開されるべきであるとする。①保険学の本質②保険の本質③保険の発展④保険の形態⑤保険と生産⑥保険と流通で、①は第1編で考察したので、②以下を第2編以下で考察する。

第2編「保険の本質」第3章「保険本質論の発展」は、保険学説を検討する。損害填補説、損害分担説、賭博説、生命保険否認説、欲望満足説、欲求充足説、客観的危険説、貯蓄説、交換取引説、確保説を取り上げる。

第4章「保険の本質」は、前章の保険学説の考察を踏まえて、保険の概念規定を行う。従来の保険学者が保険の本質において最も頭を悩ましたのは、保険の目的であったとする。それは、経済生活の確保あるいは確保欲望の満足に求められるべきであり、「保険は偶然が齎らすところの経済生活の不安を除去せんとするものである」(同p.86)として、保険と偶然の考察を行なう。偶然を

考える場合、危険事件の偶然性と保険を必要とする偶然、すなわち、経済生活を不安定にする偶然とを区別する必要がある、保険における偶然是後者で、事実の発生もしくは発生の時期が予知することが出来ない事実をいう。そして、その偶然是資本主義社会を前提とすることに注意を喚起する。かくして、「保険の目的は、資本主義社会において偶然が齎すところの個別経済の不安定を除去せんとすることにある。」(同p.92) また、その基礎をなす指導的精神は個人主義的精神であり、その結果においては、技術的に一種の相互主義を実現していることも注目される。保険技術について、保険団体に支払われた保険料総額と保険団体が支払った保険金総額とは一致しなければならず、この原則を「給付反対給付均等の原則」(Prinzip der Gleichheit von Leistung und Gegenleistung) とか「給付反対給付の予定比例性の原理」(Grundsatz der erwartungsgemässen Proportionalität von Leistung und Gegenleistung) と呼ぶとする。続いて、レクシス (Wilhelm Lexis) が示した式として、次の式を紹介している。

$$P(\text{保険料総額}) = w(\text{確率}) \times Z(\text{契約保険金総額})$$

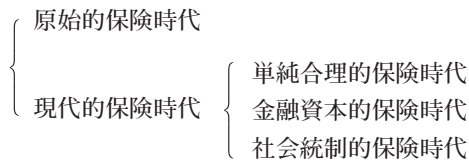
今日給付反対給付均等の原則 (レクシスの原理) として示される P (保険料) $= wZ$ (保険金) と同一式であるが、現在では総額ではなく、個々の契約の次元で把握される。繰り返しの指摘となるが、レクシスの原理についての理解ができていなかったといえる。さらに、大数の法則に言及するが、大数の法則も保険の二大原則を結びつけるものと捉えられていない。

続いて、第4節として「保険の限界と保険類似の制度」を考察する。保険の限界については、簡単に技術的限界を述べるのみである。保険類似制度は、貯蓄、賭博および富籤、投機および保証、自家保険を取り上げる。以上の考察に基づき、保険を次のように定義する。

保険とは、資本主義社会において偶然が齎らす経済生活の不安定を除去せんがため、多数の経済単位が集まって全体としての収支が均等するように共通の準備財産を形成する制度である。(同p.133)

第3編「保険の発展」は保険史を考察する。第5章「保険の生成」は、保険史の生成過程について考察する。ただし、これに先立って方法論的考察を行い、経済社会の発展過程を統一的に理解するためにはこれを発展段階的に考察するのが正しい方法であるので、特殊経済社会組織体としての保険の発展もこれに倣うことが正しい方法であるとする。このような方法に基づき、図8のように時代区分する。

図8. 近藤[1940]における時代区分



(出所) 近藤[1940]p.145の図。

この時代区分に沿った考察に先立って保険の起源について考察し、海上貸借を起源とする。古代の海上貸借が中世の冒険貸借となり、これら資金の融通と危険転嫁を兼ねた取引から危険転嫁のみの保険貸借または準保険と呼ばれるものとなり、さらに金利の受け払いのない売買形態をとる仮装売買契約となった。これは実質的な損害填補契約であり、ほどなく海上損害填補契約が登場したとする。そして、通説に従い14世紀後半イタリアの諸都市で保険が登場したとする。しかし、それは原始的保険である。

第6章「保険の発展」は、現代保険の成立を考察する。イタリアに出現した原始的海上保険は15世紀にイギリスに伝わり、1720年にRoyal Exchange Assurance Corporation, London Assurance Corporationの設立により現代的保険への発展の第一歩をしるしたとする。しかし、現代的保険への発展を推し進めたのはこの2社ではなく、2社に対抗するロイズであったとする。火災保険は1666年ロンドン大火後に火災保険会社が登場し、この点で現代的保険確率の基礎の形成が海上保険よりも早かったとの観が無きにしも非ずであるが、確率論が火災保険にも採用されるべきであるとの主張がなされたのが1842年なの

で、現代的火災保険の出現は海上保険よりも遅いとする。生命保険は、1762年に年齢別保険料率を採用したThe Society for the Equitable Assurance on Lives and Survivorshipsが近代生命保険事業の嚆矢であり、1780年のノーザンプトン表の採用で近代的保険料率の基礎が確立したとする。このように、近代的保険はそのすべてが、18世紀後半から19世紀にかけてイギリスにおいて成立したとする。現代的保険の初期単純合理的時代には、保険の本質と現象形態はほぼ一致した。19世紀末葉から第一次世界大戦前後は金融資本的保険時代となる。特に生命保険の発展が目覚ましく、金融資本としては銀行資本よりも勝っているといえるので、簡易生命保険の登場も少額所得者階級の要求に応じたというよりも、飽くこともなき金融資本が保険会社を通じて零細なる貨幣を吸収しようとしたとする。保険資本の金融資本化もしくは保険資本の金融資本制覇である。社会保険が国際的な保険として一台飛躍を遂げた第一次世界大戦以後を保険の最後の発展段階である社会統制的保険時代とする。

第4編「保険の形態」は、保険の分類と保険の経営形態を考察する。第7章「保険の分類と種類」は、保険の分類の考察である。保険の歴史的考察が、保険の形態および本質の縦の考察であるとするれば、保険の分類は横の考察であるとする。従来の保険の分類は、保険の種類を体系づけようとした技術的分類論であるが、一定の確固たる基準による分類でなければならないとする。保険の形式的本質を中心にとすると、次のような分類が成立するとする。

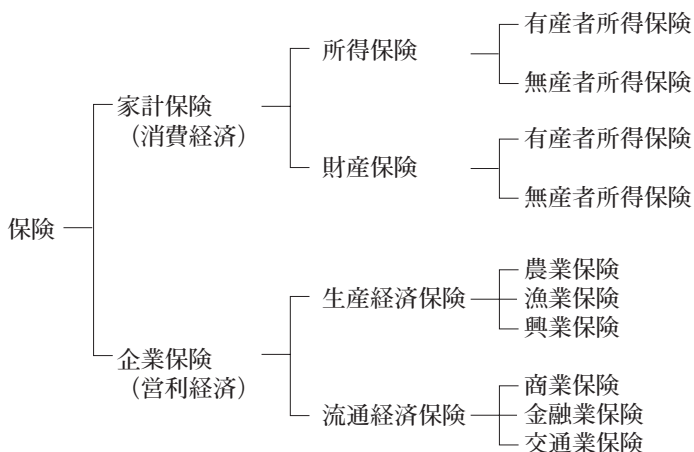
表6. 近藤[1940]における保険の分類（形態的分類）

分類規準	分類
目標：消費経済の安定、営利経済の安定 保険団体の構成員 保険団体の運営 保険団体の運営者 保険団体の運営者 保険団体への加入 危険の客体 危険の原因 保険金の大きさの確定性 保険事件発生の確定性 保険料の徴収手続き 保険期間の長短	家計保険と企業保険 階級保険と個人保険 共同経済保険と営利保険 相互保険と保険者保険 公営保険と私営保険 強制保険と任意保険 人保険と財産保険 自然的危険保険、人為的危険保険、社会的危険保険 損害保険と定額保険 確定保険と非確定保険 賦課式保険と保険料式保険 長期保険と短期保険

(出所) 近藤[1940]pp.242-244の論述から、筆者が作成。

表6の形態的分類に対して、保険の効用を基準とした図9のような実態的分類も行う。

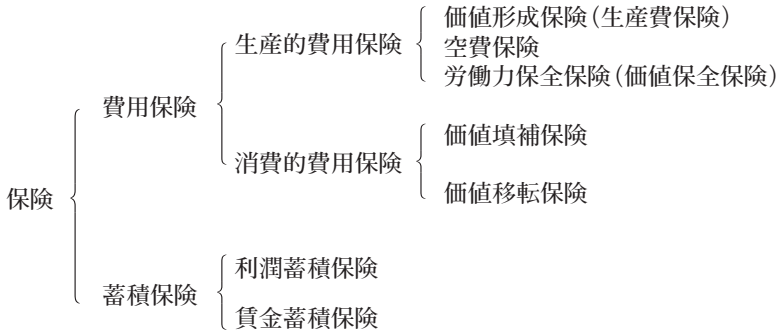
図9. 近藤[1940]における保険の分類（実態的分類）



(出所) 近藤[1940]p.247の図。

図10のような客観学派的分類も示す。

図10. 近藤[1940]における保険の分類（客観学派的分類）



(出所) 近藤[1940]p.252 の図。

次に、保険の種類を一瞥するとして、次のような個々の保険について考察する。

財産保険—海上保険，火災保険，運送保険，自動車保険，航空保険，盗難保険，身元保証保険，硝子保険，機関気罐保険，風水害保険，家畜保険，農業保険，財産生命保険，輸出信用保険，責任保険，同盟罷免保険その他

人保険—生命保険，徴兵保険，傷害保険，疾病保険，廢疾保険，出産保険と家族所得保険，失業保険

第8章「保険の経営形態」は、保険経営形態を分類して考察する。まず、営利保険と共同経済的保険に分類し、共同保険と再保険にも分ける。営利保険を提供する経営形態には、個人保険業，株式会社，相互会社の他にイギリスがかつて実施した郵便局保険のような国営保険も含めている。共同経済的保険を提供する経営形態は、相互組合，協同組合である。共同保険と再保険については、両者を企業形態とするが、両者はあくまで保険の一種であって企業形態ではないのではないかと。保険企業の集中傾向についても言及する。また、国家と保険として、保険国営論なども考察する。

第5編「保険と生産」は、保険と生産との関係を問題とする。第9章「保険の

生産性」は、保険が価値を形成するか否かという根本の問題を明らかにしつつ、その生産性を考察する。価値形成的な保険とそうでない保険があるとす。保険の生産性を論じるにあたって社会保険を大きく取り上げているが、社会保険が個人保険と異なり生産政策的側面を有することを重視しているからであると思われる。

第10章「保険と資本蓄積」は、保険金融に関わる考察である。従来、保険資金の投資運用は一般金融機関の場合と同様でなんら特殊性を持たないとして軽視されてきたが、保険の金融的機能は銀行や信託会社のそれとは同一視し難いとする（同上p.351）。損害保険の金融的機能を否定しないが、社会的な重要性は生命保険が圧倒的に大きいとして、生命保険金融の考察となっている。生命保険資金は一定の予定利率を前提とする長期の資金であり、これを前提として生命保険資金の投資原則である安全性、換金性、収利性が理解できるとする。

第6編「保険と流通」は、保険と流過程との関係を考察する。第11章「保険の価格形成」は、保険を商品とし、保険料をその価格として考察する。保険は債権といえ、それゆえ擬似的に商品と捉えることができるとする。保険商品の価格である保険料は、需要と供給によって価格が形成されるとする自由競争の下でも技術的制約を受けるとし、独占の場合もアウトサイダーの存在や保険カルテル内部の暗黙の競争があるので、自由競争の場合と大差がないとする。

第12章「保険と景気」は、景気変動と保険の関係を考察する。先行研究をカバーした上で、わが国の生命保険と景気変動の関係の実証分析を行い、数学的関数関係は見られないがある程度の照応を示しているとする。さらに、世相を反映して、保険と恐慌、インフレーションの関係も考察する。

ドイツ保険学を主たる先行研究として保険本質論を重視しながら、一貫して経済学的立場から考察されているといえる。特に、第5編の考察は、これまで取り上げてきた文献ではほとんど扱われていない内容が多い。

(12) 印南博吉 [1941a] , 『保険経営経済学』 笠原書店。

本書は、当時経済学界で注目の的となっていたゴットル（Friedrich von Gottl-Ottlilienfeld）の理論によりながら、経営経済学的立場から考察する。

第1章「経営経済学の性質」は、経営経済学について考察する。経営経済学は、企業の形態をとる目的形成体の運動を対象とする経済学であるとする。

第2章「保険事業の本質」は、保険ではなく、保険事業の本質を考察する。「保険思想は人類それ自身と共に古くから存した」(印南 [1941a] p.34) との見解は誤りであるとする。この見解は保険の相互扶助性の主張と結びつくことが多いので、この点から著者は保険の相互扶助性をも否定していると思われる²⁾。保険事業にとって最も重要なことは、多数の加入者が糾合することによって保険料が射倖的対価から合理的対価に転化していき、保険事業そのものも射倖性を減じて合理性、確実性を加えるに至ったとする。そして、多数の加入者の糾合は、資本主義によって可能となったとする。この見解は誤りではないが、危険率に言及していない点で、極めて不十分な見解である。危険率に基づく保険料こそが合理的保険料であり、それを現実にするのはそのような算定を可能とする保険数学やデータの整備という保険料算出技術と合理的理論値に実際の保険金支払いがなるような多数の加入者の糾合＝保険団体の形成とすべきだからである。

志田鍾太郎の入用充足説の定義文に従い、保険事業の本質的任務を保険料を徴収して偶発的入用の充足のために保険金を支払うこととし、したがって、保険事業は産業経営経済でも商業経営経済でもなく、貨幣取引経営経済とする。これは保険の本質を金融とする見解³⁾と親近性を有するが、保険金融説は肝心の金融概念が曖昧であり、保険は払込額と受取額が甚だしく相違するなどの特徴を有する点で特殊であるとする。ここで、レクシスの原理「給付反対給付均等の原則」(das Prinzip der Gleichheit von Leistung und Gegenleistung)を取り上げる⁴⁾。保険加入者数を n 、保険料を P 、その内 a 人が保険金 Z を受け取る場合

2) 今日でもわが国では保険の相互扶助性の主張が強くみられるが、生命保険業界に関わる代表的な主張である生命保険文化センターの『生命保険物語——助け合いの歴史』(生命保険文化センター [1977])は、引用文と同様な立場で保険の相互扶助性を主張する。この点については、小川 [2008] p.80を参照されたい。

3) 印南はこのような見解として、米谷[1937]、小島[1928]をあげる(印南[1941a]pp.47-48)。

4) 本書発行と同じ年にレクシス[1909]の翻訳も行っている(印南[1941b])。

$$nP = aZ$$

は保険料総額と保険金総額が等しいことを示し、これをレクシスの原理とする(同p.51)。また、「保険団体の自足性」(同p.51)を指摘する。そして、この式を

$$P = \frac{a}{n} \cdot Z$$

と変形し、できる限り $\frac{a}{n}$ の近似値を求めるとする。これを事前における予測と考えれば偶然事件の確率に該当し、レクシスは ω で表し、給付反対給付均等の原則が標準となるためには、

$$P = \omega Z$$

であることを前提とするとした。

次に、保険加入目的を問題とする。加入目的といった主観的な事柄で保険の本質を把握すべきではないとする学説もあるが、加入目的は本質理解に不可欠な一要素とする。小島昌太郎、近藤文二による保険学説の網羅的研究により、ワグナー (Wagner) ・損害分担説、ヘルマン (Herrmann) ・賭博説、エルステル (Elster) ・生命保険否認説、クロスタ (Krosta) ・客観的危険説、ヒュルセ (Hüssle) ・交換取引説、ウィレット (Willet) ・静態論的保険本質論、リーフマン (Liefmann) ・交換取引説、イエッセン (Jessen) ・財産保全説、リンデバウム (Lindenbaum) ・現在欲望説、ヘルペンシュタイン (Helpenstein) ・確保説、ローテ (Rothe) ・確保入用充足説などの代表的保険学説が、それぞれ特徴を有しながらも何らかの欠点があることを知りうる。こうして、ゴッピを源とする入用充足説、フプカ (Hupka) に始まる経済生活確保説の2説のみが問題に足るとする。強力な経済生活学を建設したゴットルが入用概念を経済学的思考の出発点としたように、入用概念が適切であると。やや限定されてはいるが、保険学説考察の章ともなっている。

第3章「保険事業の分類」は、事業主体、保険種類を基準に保険事業を分類する。前者については、危険団体についての考察から始まり、それを保険の目的とすると共同体として捉えることと結びつくが、相互利益主義に基づいたものであり、保険の方法とすべきとする。事業主体を基準とした分類という点からは、危険団体は無関係な議論に思えるが、社会保険のように事業主体によっ

て共同的保険への動向を示すものがあり、事業主体と危険団体の関係を重視する。こうして、相互保険組合、協同組合から保険相互会社、保険株式会社へと考察を進める。後者については、保険の種類の違いは保険料算定の前提である発生確率に影響を与えるので重要とする。この場合は危険の性格に応じた保険の分類とでもいふべきものを基準としているに過ぎず、パターン化している保険のさまざまな分類基準との関係で問題とされるのではなく、本章では保険経営の影響と関係する保険の分類が重視される。

第4章「保険企業の経営組織」は、保険企業の経営組織について考察する。まず、保険資本を銀行資本と同様の貨幣取引資本と貸付資本との総合と捉えるが、保険資本にとっては貸付資本の機能が副次的とする。この資本の働きから保険企業の経営組織は、蓄積貨幣の蒐集と保管および貸付、支払という3つの機能を中心に形成されるとする。統括業務、徴収業務、資金運用業務、充足業務を考察する。

第5章「保険企業の経営動態」は、保険企業の経営過程について考察する。設立、解散、合併などを考察する。自由競争の下では過大な競争が発生し、社会問題となるので多くの国で何らかの制限を行っており、保険事業は独占的事业になっているとする。カルテル、コンツェルンなどについて、わが国の保険業界を取り上げて考察する。

第6章「安全維持の手段」は、保険事業における企業危険への対応手段を考察する。保険事業における企業危険として、数学的危険、多数契約の獲得維持、経済界の変動による影響をあげる。このうち多数契約の獲得維持に関しては前章でふれているので、本章では数学的危険、経済界の変動による影響について考察する。

第7章「保険企業の収益及び合理化」は、収益は内部的合理化の度合いに比例すると考え、経営比較についても論及しつつ収益について考察する。第一生命保険相互会社の貸借対照表、損益計算書を使って考察する。資産売却及評価損益は貨幣価値変動によるところ大であり、運用利回りを計算することにおいては除外することが望ましいとしているのが注目される（同pp.226-227）。保険業法第86条に象徴されるように、当時キャピタル・ゲインは利益に非ずとい

うのが通念と思われる⁵⁾。なお、本章で簡単ではあるが保険金融について考察している（同pp.256-261）。

第8章「保険企業の批判」は、保険の本来の役立ちに対して保険企業に正しい在り方を認めうるか否か、いかなる批判がなされねばならないかについて考察する。損害保険は企業保険の性格が強く加入者と保険者が対等の地位に立つのに対して生命保険は加入者が弱者の地位にあるので、生命保険に対する批判の余地が大きいとして、利用者の批判として生命保険について考察する。続いて、当時の高度国防国家を目指す新体制と保険事業との問題を考察する。志田が示した保険の要件（志田[1927]p.11）に基づいて行う。最後に、保険は協同体から離れて自由になった個別経済体が間接的に協同体的庇護を求めたことに基づいて出現したものであるため、保険事業の存在は究極において協同体の立場からは是認されるが、その反面保険事業の存在の仕方が存在理由を裏切る場合は、そのままの存在は否定されなければならないとする。

テキストとして書かれているが、ゴットル理論による経営経済学的立場からの考察なので、かなり特異な構成となっている。レクシスに注目し、保険の原理を取り上げている点が、非常に重要である。 $nP=aZ$, $P=\omega Z$ と今日の保険の二大原則に結びつく式が登場している点で当時の類書に対して卓越しているといえるが、レクシスの原理を類書と同様に保険団体の次元の原則と捉えるという誤りを犯しているのが残念である。しかし、戦後印南はレクシスの原理の正しい解釈を求めながら、保険の二大原則的把握に画期的な貢献をすることになる。この時点ではその印南でさえ、レクシスの原理の理解が不十分であったことが特筆される⁶⁾。

(13) 西藤雅夫[1942], 『保険学新論』立命館出版部。

本書は、保険の本質を機構として捉えるという新しい観方に基づくため、「新論」と題するとのことである。3編で構成され、中心をなす機構の分析は第

5) この点については、小川[1987]を参照されたい。

6) 印南自身がこの時点の自分の見解の不十分さを振り返っている（印南[1951]）。

2編「保険の本質とその機構」であり、第1編「保険の意義とその職能」はこの本質論に向けた序論であり、第3編「保険の経営とその制度」は附論とする。

第1編「保険の意義とその職能」第1章「保険の基礎概念」は、保険成立の要素、限界を考察したのち、保険理論の二面性について考察する。保険を次のように定義する。

保険とは、偶然なる事件のうちにありて、なお経済生活の確保のために、多数人が共同して、貨幣を獲得するところの仕組みである。(西藤[1942]p.4)

この定義から保険の要素を4つ導き出し、4つの要素の必要性を保険類似制度の考察により明らかにする。保険類似制度として、貯蓄、頼母子講または無尽、賭博または富籤、保証、自己保険をあげる。次に、国民経済的、企業経営、法律制度の点から保険の限界について考察する。企業経営に関して、同時性の危険、過大な危険、過小な危険などが保険の限界としてあげられているので、通常技術的限界として指摘されるものを保険企業の観点からの限界としていると思われる。交換の原則が基本的限界を与え、その成立には貨幣経済の発達、信用の発達を要するとする。さて、その本質を機構として把握できる保険とするが、加入者の立場に立てば経済生活の確保という消費者の効用として捉えることができ、保険企業の立場に立てば保険料と保険金との交流の操作という生産者の技術という側面から捉えることができるとする。この効用と技術という二面性を保険理論の二面性とする。

第2章「保険の効用」は、保険の目的について考察する。欲求とその充足の持続的調和に対する阻害である経済生活の不安定を除くことが保険の目的であり、保険の効用であるとする。マーネスの欲望説などとの比較がなされ、保険金の支払いによって欲望が満足されるのではなく、保険金の支払いの有無にかかわらず確保の欲望が満足されるということとする。

第3章「保険の技術」は、保険という機構運営の操作である保険特有の技術について考察する。保険についてはしばしば相互性が指摘されるが、技術的相互性に過ぎず、保険技術的要請で保険団体が形成されるとする。この機能の成

立を可能とするのが、偶然の利用によって偶然を除去する大数の法則である。しかし、保険料の正確な計算は、保険料個別化の原則または等価の原則による。これを追求すれば保険団体の大きさに制約を受けることとなるので、保険料個別化の原則と大数の法則とは対立するが、危険の混合なども見られ、実際の運用において厳密に危険の同類性を要求しているわけではないとする。なお、保険料についてレクシスの式を次のように紹介している。

$P=W \times Z$ P：保険料，W：蓋然発生率，Z：保険金額

これを給付反対給付均等の原則（Prinzip der Gleichheit von Leistung und Gegenleistung）または給付反対給付予定比例の原則（Grundsatz der erwartungsgemässen Proportionalität von Leistung und Gegenleistung）と呼ばれるものであるとする。式は保険料と保険金の総額ベースの把握となっていないので、正しいレクシスの原理の理解といえるが、この式の前段の説明で「一定期間に於て、その受取る保険料の総額と、その支払う保険金の総額とは、均等の関係に置かれることとなる」（同p.107）としていることから、類書と同様な誤解をしていると思われる。

第2編「保険の本質とその機構」第1章「保険に於ける資本」は、保険を資金交流の機構と捉えて考察する。保険は貨幣交流の機構であるが、貨幣は価値増殖の道筋におかれた場合資本となり、特に資金と名付けられるとする。この資金交流は資本の形成と分解との一連の結びつきであり、いずれの時に銀行預金の形をとるので金融資本の循環の始点に結びつくとする。

第2章「保険に於ける費用」は、資本の犠牲部分である費用について考察する。費用を事業における資本の循環で把握し、保険事業に於ける資本循環を保険金支払いの系統、保険労務に対する支出の系統で分け、それぞれ費用と考えられるべきとする。

第3章「保険に於ける危険」は、保険の本質について所説が一致しないが保険を危険もしくは損害概念より明らかにしようとする見解が有力なので、危険について考察する。企業危険についての代表的な見解を検討して、見解の一致が見られないものの、企業経営にとって好ましくないこと、何らかの手段、蓋然発生率によって予測されるという点を共通点とする。結論として、保険にお

ける危険は保険金の支払いに求められるとする。

第4章「保険の非商品性」は、保険の商品性について考察する。まず、商品の本質を考察し、労働の生産物に限定するか、広く関係財も含めて貨幣の交換まで含めるかの違いは立場の違いとするが、保険はいずれでもなく、保険現象は商品概念によらずして分析解明できるとする。

第5章「保険の金融性」は、保険事業の金融事業としての成果について考察する。保険事業における本来の金融といわゆる保険金融を保険事業における派生的第二次的金融とする。

第3編「保険の経営とその制度」第1章「保険事業に於ける投資」は、保険資金の原資、運用について考察する。責任準備金の構成によって原資の考察を行い、責任準備金の運用を考察するが、生命保険と損害保険の違いに配慮がされる。適正の原則、分散の原則として投資の原則についても考察する。

第2章「保険と信用との制度的関連」は、保険と信用の二つの機構は本来相互に関連するものとして考察する。対物的関連、対人的関連に分けて考察する。

第3章「保険料の統制」は、価格統制令等を受けて保険料はいかに統制するべきかについて考察する。保険における価格についての考察ともいえる。保険における非商品性から、保険における価格は、保険料のみならず、保険金についても見ることができるとする。また、純保険料と付加保険料の別も重要であるとする。

付録として「保険業法及び同施行規則」の解説を行う。

パターン化した考察からかけ離れた、一貫した経済学的考察がなされ、テキストというよりも研究書とした方が適切かもしれない。ただし、保険の本質を資金交流の機構として保険資本の循環に基づいて何でも説明しようとするため、何を目的とした制度なのかが見失われ、見方がずれている。

(14) 園乾治[1942], 『保険学』慶應出版部。

第1章「保険の意義」は、保険の必要な理由を明らかにして、その本質を考察する。個人主義を基本とする社会であるため、確定的事故もしくは偶然的事故によって経済的不安定にさらされているとする。その対処手段に予防、鎮圧、

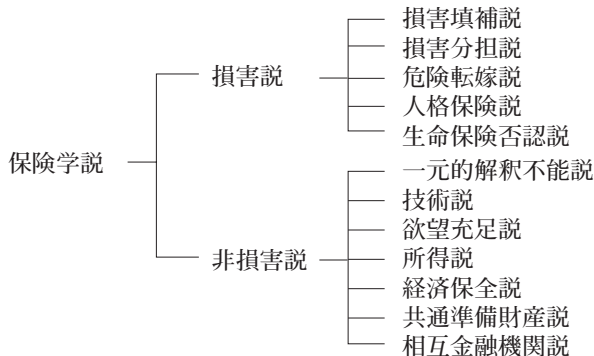
善後策の3段階があり、その善後策の施設に個別的方法の貯蓄と共同的方法の保険があるとする。貯蓄と保険の比較検討がなされ、貯蓄は確定的事故に関連する個別の対応、保険は偶然的事故に関連する共同の対応とするが、これでは他の施設との相違が十分に明確にならないので、保険の本質について考察する。保険の本質については、次の7点を指摘する形をとる。

1. 経済生活の不安に対する善後策の一つ。
2. 準備財産を作成する。
3. 作成される準備財産は、共通の準備財産である。
4. 共通準備財産の作成は、相互主義に基づく。
5. 有償であることを要する。すなわち、拠出を必要とする。
6. 拠出は合理的計算に基づく。
7. 偶然を克服して、合理化する作用を有する。

なお、この本質的考察において、保険を「相互主義に基づく金融機関である」(同p.11)としているのが注目される。保険の限界については、総括的限界としての経済生活の不安の存在、その他に偶然事故の存在、しかも、稀な事故、特殊の地域や特殊の者・事物のみに発注する事故でないことを指摘する。

第2章「保険の定義」は、保険学説と保険類似制度を考察する。保険学説の発展の流れを整理したのち、図11のような個別の保険学説を考察する。

図11. 園[1942]の保険学説



(出所) 園[1942]pp.19-38の論述から、筆者が作成。

以上の保険学説を考察したのち、共通準備財産説に相互金融機関説の表現を取り入れ、次のように定義する。

保険とは経済生活を安定せしめるために多数の者が団結して合理的計算を以て作成する相互主義の金融施設である。(同p.38)

続いて、保険の本質を一層明確にするために保険類似制度の考察を行なう。保険類似制度としては、貯蓄、無尽・頼母子講、富籤・賭博、慈善的施設、共済施設、自家保険を取り上げる。

第3章「保険の種類」は保険の分類の考察である。保険の分類には、実際上の便宜や経営その他の歴史的理由によるものがたくさんあるが、それらは科学的分類とはいえないとする。いわば非科学的分類として、表7の分類を考察する。非科学的ではあるがその存在理由や科学的分類について考察するとするが(同p.49)、存在理由の説明は不十分であり、何らかの体系的意図をもった科学的分類が示されるわけでもない。

表7. 園[1942]における保険の分類 (非科学的分類)

分類規準	分類
商法	損害保険と生命保険
事故の対象 (保険の目的)	人保険と物保険
保険の経営主体	公営保険と私営保険
経営動機 (経営目的)	営利保険と非営利保険
被保険者の社会的地位	社会保険と普通保険
保険料および保険金の支払い	一時払保険と分割払保険
同上	自然保険料式保険と平準保険料式保険
同上	損害保険と定額保険

(出所) 園[1942]pp.49-70の論述から、筆者が作成。

以上の第3章までが保険総論に相当するといえ、第4章「生命保険」、第5章「火災保険」として保険各論の考察となる。第4章では、保険総論部分では強調されていないが相互扶助精神が保険にとって必須のものとの指摘がなされる

(同p.72)。そして、相互扶助という点では古代から共通するが、合理的な拠出に基づかないという点で原始的保険と現代保険に分かれるとする。本章では、生命保険の歴史についても考察する。なお、相互金融機関説を重視するように、保険の金融面を重視しているためか、本章第4節を「生命保険会社の資産運用」(同pp.134-160)として保険金融の考察を行っているのが特筆される。

第5章「火災保険」は、火災保険の考察を行うが、ここでも歴史的考察を行なう。

保険の定義文を使ってその要件を導くというのが通常のパターンであるが、(要件というより特徴といった方がよいかもしれないが)要件(特徴)が先に来て、定義文が後に来ている。保険学説の検討をし、共通準備財産説と相互金融機関説を関連付けた独自の保険の定義をしているだけに、パターン化した保険学説の考察→独自の保険の定義→保険の要件といった論旨の展開の方が良いのではないか。また、保険各論がなぜ生命保険と火災保険になるのか理解できない。本質を重視した科学的思考を基本姿勢としていていると思われるが、このような保険各論は科学的思考とは全く逆行しよう。また、保険各論でそれぞれの保険の歴史が考察され、しかも保険史一般として相互扶助を歴史を貫く特徴として拠出金の合理性を原始的保険、近代保険の分類基準としいるのであれば、海上保険史に触れないというのは、保険史の考察として体をなさないのではないか。保険金融を重視した考察など優れた点多々あるが、基本的な構成に疑問が残る。

3. 外国の文献について

各テキストが参照している外国の文献についてみてみよう。

(1) 奥村[1912]は、特に文献リストや参考文献表示がない。Brämer, Versicherungswesenを唯一紹介しているぐらいである(奥村[1912]p.139)。

(2) 栗津[1921]は、詳細な文献リスト(栗津[1921]pp.107-120)があり、外国語の文献も「教科書様のものを選びたる」(同p.120)として紹介する。一般に類書ではドイツ語の文献が多いが、英語の文献が多く、また、フランス語の

文献も紹介している。文献リストのものを下記に掲載する。

Blanchard, Liability and Compensation Insurance, New York.

Chauffton, Les Assurances, Paris.

Comyns Carr, National Insurance, London.

Dawson, Practical Lessons in Actuarial Science, New York.

Domizlaff, Die Feuerversicherung, Berlin.

Gephart, Principles of Insurance, New York.

Gow, Sea Insurance.

Hamon, Cours d' Assurance, Paris.

Henderson, Industrial Insurance in the United States, London.

Hoffman, Insurance Science and Economics, New York.

Huebner, Property Insurance, New York.

Jack, Fire Insurance and the Municipalities, London.

Karup, Lebensversicherung, Leipzig.

Kitchen, Principles and Finance of Fire Insurance.

Laurent, Theorie et Practique des Assurances sur La Vie, Paris.

Manes, Grundzüge des Versicherungswesens, Leipzig.

Manes, Versicherungswesen, Leipzig.

Richter, Handbunch des Versicherungsarztes, Leipzig.

Schooling, The Life Assurance Explained, London.

Templeman, Marine Insurance, London.

Walford, Insurance Guide and Handbook, London.

Woodburry, Social Insurance, New York.

Wörner, Die Allgemeine Versicherungslehre, Leipzig.

Young, Insurance, London.

Zartman and Price, Yale Readings in Insurance, New Haven.

(3) 志田[1927]は、文献リスト、参考文献表示がないが、本文中に登場する文献をあげれば、ワグネール (Adolph Wagner) 『保険論』、『国家と保険』、マー

ネス (Alfred Manes) [1905] 『保険論』, 同[1906] 『保険要論』, ショーフトン (Albert Chaufton) [1884] 『保険論』である。

(4) 小島[1929]は、文献リスト、参考文献表示がないが、本文中に文献が表示されているので、それらを下記に掲載する。保険学について、保険学説のところで先行研究を取り上げる形で文献が紹介されるので、ほとんどがドイツの文献となっている。また、専門用語について、ドイツ語併記が目立つ。

Chon, System der National ökonomie.

Crawlay, The Law of Life Insurance.

Gobbi, Ulisses, Die Theorie der Versicherung begründet auf den Begriff der eventuellen Bedürfnisse.

Herrmann, Emanuel, Die Theorie der Versicherung von wirtschaftlichen Standpunkte, Wien.

Herrmann, Emanuel [1897], Die Theorie der Versicherung ist das Stiefkind der Volkswirtschaftslehre.

Hülse, Friedlich [1917], Versicherungswissenschaft und Versicherungskunde; Eine Untersuchung über das Wesen der Versicherungslehre; Zeitschrift für die gesamte Versicherung-Wissenschaft. 17 te Band, Berlin.

Hülse, Friedrich [1915], Versicherung und Wirtschaft; Eine Untersuchung über den Begriff der Versicherung in der Volkswirtschaftslehre. Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik, Bd. 104.

Hupka, Joseph, Der Begriff des Versicherungsvertrages; Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht und Konkursrecht, Bd. 66.

Kohler, Josef, Versicherungsrecht; Dernburg bürgerliche Recht des deutschen Reiches und Preussens.

Krosta, Benno [1910], Über den Begriff Versicherung, Bonn.

Manes, Versicherungswesen.

Philippovich, Eugen von [1909], Grundriss der politischen Oekonomie.

Phillips, A Treatise on the Law of Insurance.

Vance, Handbook of the Law Insurance.

Vivante, Cesare, il contratto di assicurazione.

Wagner, Adolf, Versicherungswesen, Schönbergs Handbuch der Politischen Ökonomie.

Willett, The Economics Theory of Risk and Insurance.

(5) 柴[1931]は、保険概念論(柴[1931]p.60)、保険経営論(同p.246)に関する日本の文献をリストするが、外国文献については参考文献表示も含めてない。保険学説でドイツの学者などの名前は紹介されるが、文献は紹介されない。

(6) 末高[1932]は、各單元ごとに参考文献が掲載されており、文献表示がもっとも充実しているといえよう。参考文献の大半は、外国の文献である。これらをすべて列挙するとなると膨大な量となるので、第1編総論に関して参考書をあげているので(末高[1932]pp.219-220)、そのうちの外国のものを下記に掲載する。

Biddle[1893], Treatise on the Law of Insurance.

Chaufton[1884], Les Assurance.

Chaufton[1924], Versicherungslexikon, 2te Auf..

Ehrenberg, Versicherungsrecht.

Frinch[1899], Digest of Insurance Cases.

Gephart[1913], Insurance and State.

Hoffman, Insurance Science and Economics.

Manes[1921], Versicherungsstaatsbetrieb im Auslande.

Manes[1924], Versicherungswesen, 4te Auf..

Moldenhauer[1912], Das Versicherungswesen.

Peach[1895], Commentaries on the law of Insurance.

Riegel=Loman[1921], Principles of Insurance.

Walford, Insurance, Handbook.

Walford[1878], Insurance Cyclopaedia.

Wörner[1920],Allgemeine Versicherungslehre.

Young[1903],Insurance.

Young,Organization of Insurance Offices.

(7) 酒井[1934]は、附録Ⅲを「文献解説」として文献の紹介が充実している。ただし、解説が主であるため、紹介されている文献の数は必ずしも多くない。また、保険以外の経済学や経営学の文献についても紹介している。下記に「文献解説」の中から、保険に関わる外国の文献を掲載する。

Arnould[1924],On the Law of Marine Insurance,2vols.11ed..

Chalmers=Stevenson[1930],The Marine Insurance Act1906.

Danjon,Traité de Droit Maritime. 5Vols. 1878-1918.

Danjon,Traité de Droit Commercial Maritime. 5Vols. 1878-1888.

Ditto[1924],Der Versicherungsgedanke in der Verträgen des Seeverkehrs
vor der Entstehung des Versicherungswesen (Zeitsrift.f.Sozial-
u.Wirtschaftsgeschichte. II .Bd.) .

Ditto[1927],Technik und Behandlung der Rückversicherung.

Dörfel[1931],Versicherungswirtschaftslehre.

Dorn[1931],Zur Einteilung der Versicherung (Festgabe für Manes) .

Droz,Traité de Assurances Maritimes 1881.

Gardiner[1921],Reinsurance.

Goldschmidt[1891],Universalgeschichte des Handelsrechts,Bd. I .

Gow[1909],Marine Insurance.

Gürtler[1929],Theorie und Praxis der Versicherungsbuchführung.

Helpenstein[1930],Theorie der Versicherung, Privat-u.Sozial-Versicherung
(Versicherungsarchiv. Nr.5 u. Nr.6) .

Hermannsdorfer[1924],Wesen und Bedeutung der Rückversicherung.

Hermannsdorfer[1928],Versicherungsunternehmungen und Konzentration.

Hoffman[1911],Insurance Science and Economics.

Huebner[1920],Marine Insurance.

- Koburger[1923],Versicherungsbuchführung.
- Lengyl.Versicherungsbuchführung (Handwörterbuch der Betriebswissenschaft.Vol.V.).
- Manes[1919],Versicherungs-staatsbetrieb im Ausland.
- Manes[1930],Allgemeine Versicherungslehre.
- Martin[1876],History of Lloyds and Marine Insurance.
- Müller[1914],Anlage und Verwaltung der Kapitalien der Versicherungsgesellschaften.
- Patzig[1925],Versicherungsbetriebslehre.
- Reatz[1870],Geschichte des europäischen Seerersicherungsrechts.
- Schaube,Die Wahre Beschaffenheit der Versicherung in der Entstehungszeit des Versicherungswesen (Zeitschrift f. Nationalö.u. Statistik. Bd.V) .
- Stone=Cox[1931],Fire and Marine Insurance Year Book.
- Templeman[1918],Marine Insurance.
- Thaller et Ripert,Traitè Théorique et Pratique de Droit Commercial et Droit Maritime. 1918.
- Wagner,Versicherungswesen (Schönbergs, Handbuch der Politischen Ökonomie.Bd. II.) .
- Wagner[1881],Der Staat und das Versicherungswesen.
- Winter[1929],Marine Insurance.
- Worsley=Griffith[1930],The Romance of Lloyds,from Coffee-House to Palace.
- Wright=Faile[1928],A History of Lloyds from the Founding of Lloyds Coffee-House to the present Day.
- Young=Master[1906],Insurance Office Organization,Management and Accounts.

(8) 三浦[1935]は、第1章で保険研究の沿革と関係させて保険学の文献について

て考察し（三浦[1935]pp.40-52ノ3），章末にリストを掲載している。「海外文献」としたリストは，保険一般教科書について，ドイツ，イギリス＝アメリカ，フランスに分けて列挙する。リストされている外国の文献の数は，ドイツ22，アメリカ＝イギリス15，フランス2で，やはりドイツが1番多い。下記には，このリストに掲載されている外国の文献を掲載する。

ドイツ

Brämer,H.u.Brämer,K.[1894],Das Versicherungswesen,Lpz.

Dörfel,F.[1931],Versicherungswirtschaftslehre,Berl.u.Wien.

Ducker,A.[1927],Versicherungswirtschaftslehre,Berl.

Emminghaus,B,[1912],Das Versicherungswesen,3.Aufl,Lpz.

Gallus,W.[1874],Die Grundlagen des gesamten Versicherungswessens,Lpz.

Grosse,R.W.n.d.,Wirtschaft und Versicherung,Lpz.

Heag,H,[1919],Leitfaden zur Einführung in das gesamte Versicherungswesen,Münch.u.Berl.

Haenichen,W,[1921],Das Versicherungswesen,Gemeinverständliche

Darstellung der gesamten Privat-und Sozialversicherung,4.Aufl,Berl.

Herrmann,E.[1897],Die Theorie der Versicherung vom wirtschaftlichen Standpunkte,Wien.

Herrmannsdorfer,F.[1928],Versicherungswesen,Berl.

Hülse,F.[1914],Versicherung u. Wirtschaft,Eine Untersuchung über den Begriff der Versicherung in der Volkswirtschaftslehre,Diss.,Halle.

Jannott,K.[1930],Das Versicherungswesen in Volks-und Weltwirtschaft, Jena.

Jannott,K.[1932],Wirtschaftskrise und Versicherungswesen,Jena.

Krosta,B.[1910],Über den Begriff Versicherung,Diss.,Bonn.

Manes,A.,Versicherungswesen,System der Versicherungswirtschaft 5 Aufl.

Bd.1.Versicherungslehre,Lpz.u.Berl,1930.

Bd.2.Güterversicherung,Lpz.u.Berl,1931.

Bd.3.Personenversicherung,Lpz.u.Berl,1932.

- Moldenhauer, P., Das Versicherungswesen, I : Allgemeine Vers.-lehre. 3 Aufl., Berl, 1917, II : Die einzelnen Versicherungszweige, 2. Aufl., Berl, 1923.
- Patzig, A. [1925], Versicherungsbetriebslehre, Esslingen.
- Prange, O. [1920], Die Sozialisierung des Versicherungswesens 2. Aufl., Jena.
- Rothe, B. [1931], Grundlegung zu einer sozialökonomischen Theorie der Versicherung, Jena.
- Stephinger, L. [1913], Versicherung und Gesellschaft, Jena.
- Wörner, G. [1920], Allgemeine Versicherungslehre, 3. erw. u. verb. Aufl., Lpz.
イギリス=アメリカ
- Cady, E. W. [1925], Outlines of insurance, 2. ed., N. Y..
- Crobaugh, C. J. [1931], Handbook of insurance, N. Y..
- Day, A. C. [1922], The birth and growth of insurance, Lond..
- Eke, J. A., The Principles of insurance and their application, Lond..
- Gephart, W. F. [1911], Principles of insurance, N. Y..
- Haines, F. H. [1926], Chapters of insurance history: The origin and development of insurance in England, Lond..
- Hardy, C. O. [1924], Readings in risk and risk-bearing, Chic.
- Hoffman, F. [1911], Insurance science and economics, N. Y..
- Hoskins, B. C. [1927], An insurance Lexikon, Lond.
- Insurance (The) guide and hand-book, 6 ed., in 2 vols. ed. by Andras, H. W., Lond., 1922.
- Jack, A. F. [1912], An introduction to the history of life assurance, Lond..
- Mowbray, A. H. [1930], Insurance: Its theory and practice in the United States, 1. ed., Lond.
- Riegel, R. & Loman, H. J. [1924], Insurance principles and practices, 3. ed., Lond.
- Willet, A. H. [1901], The economic theory of risk and insurance, N. Y..
- Williams, I. [1903], Insurance definitions: A serio-comic dictionary of insurance terms, Indiana.

フランス

Ancey C.[1903],L'assurance.Sa technique Son mécanisme,Paris.

Véson,P.et Pourcheiroux,F.[1927],Assurance,Paris.

(9) 磯野[1937]は、法学的知識が重要であるとして、判例や約款などが取り上げられていることもあり、文献表示がない。文献リストもなく、保険の本質の考察でドイツの研究者の名前があがるが、文献は示されない。

(10) 勝呂[1939]は、目次の後に文献リストがある(勝呂[1939]序pp.17-22)。リストされている外国の文献の数は、ドイツ26、アメリカ14、イギリス7、フランス1で、三浦[1935]と同様である。下記には、そのリストに掲載されている外国の文献を掲載する。

Ackerman,S.B.[1928],Insurance:A Practical Guide for Various Forms of Coverage:The Policy Contracts and the protection afforded Purchasers,New York.

Andreoli,E.[1932],Die Bedeutung der Währungsprobleme in der Versicherung und Rückversicherung,Wien.

Banfield,G.E.[1929],The Principles and Practice of Accident Insurance,London.

Baldwin,W.E.,[1936],New York Insurance Law,1936 edition,New York.

Dörfel,F.[1931],Versicherungswirtschaftslehre,Wien.

Douffert,H.[1938],Die Statistik im Versicherungsbetrieb,Leipzig und Berlin.

Düker,A.[1927],Versicherungslehre,Berlin.

Eke,J.A.,The Elements of Insurance:A Guide to the Principles and Practice of Accident,Fire,Marine and Life Insurance,London.

Emminhaus,B.[1912],Das Versicherungswesen,Dritte Auflage,Leipzig.

Fauteck,O.und Emmel,K.[1930],Die Sozialversicherung,Berlin,Leipzig.

Gephart,W.F.,[1913],Insurance and the State,New York.

Gephart,W.F.,[1922],Principles of Insurance (Volume I :Life) New York.

Golding,C.E.[1937],The Law and Practice of Reinsurance,London.

- Gürtler, M. [1929], Die Theorie und Technik der Versicherungs-Buchführung, Berlin.
- Hardy, C. O. [1923], Risk and Risk-bearing, Chicago.
- Heise, H. J. [1932], Die Rückversicherung als Haftpflichtversicherung, Berlin.
- Herrmannsdorfer, F. [1926], Versicherungsunternehmen und Konzentration, Berlin.
- Herrmannsdorfer, F. [1927], Technik und Bedeutung der Rückversicherung, München.
- Herrmannsdorfer, F. [1928], Versicherungswesen, Berlin.
- Hoffman, F. L. [1911], Insurance Science and Economics, New York.
- Huebner, S. S. [1920], Property Insurance, New York and London.
- Huebner, S. S. [1927], The Economics of Life Insurance, New York and London.
- Jannott, K. [1930], Das Versicherungswesen in Volks- und Weltwirtschaft, Jena.
- Jannott, K. [1932], Wirtschaftskrise und Versicherungswesen, Jena.
- Koburger, J. [1923], Versicherungs-Buchführung, Berlin.
- Kulp, C. A. [1928], Casualty Insurance, New York.
- Maclean, F. J., The Human Side of Insurance, London.
- Maclean, J. B. [1929], Life Insurance, New York.
- Manes, A. [1932], Grundzüge des Versicherungswesens, Fünfte, Veränderte und erweiterte Auflage, Leipzig und Berlin.
- Manes, A., Versicherungswesen, System der Versicherungswirtschaft, Fünfte völlig veränderte und erweiterte Auflage in drei Bänden, Erster Band: Allgemeine Versicherungslehre, Leipzig und Berlin, 1931.
- Zweiter Band: Güterversicherung, Leipzig und Berlin, 1931.
- Dritter Band: Personenversicherung, Leipzig und Berlin, 1932.
- Mayet, P. [1893], Agricultural Insurance in organic connection with Savings-

- Banks, Land-Credit, and the Commutation of Debts (Translated from the German by the Rev. Arthur Lloyd.) , London.
- Michelbacher, G.F. [1930], *Casualty Insurance Principles*, New York.
- Mirimonde, A. [1928], *De Manuel Pratique des Assurances*, Paris.
- Moldenhauer, P., *Das Versicherungswesen in zwei Bänden*
Erster Band: *Allgemeine Versicherungslehre*, Vierte, verbesserte Auflage, Berlin und Leipzig, 1925.
Zweiter Band: *Die einzelne Versicherungsweige*, Zweite Auflage, Berlin und Leipzig, 1923.
- Prange, O. [1920], *Die Sozialisierung des Versicherungswesens*, Zweite Auflage, Jena.
- Rothe, B. [1931], *Grundlegung zu einer sozialökonomischen Theorie der Versicherung*, Jena.
- Royle, J. [1914], *War and Insurance*, New York.
- Rubinow, J.M. [1916], *Standards of Health Insurance*, New York.
- Sändig, J. [1927], *Der Versicherungspool*, Leipzig.
- Sohr, F. et, Doosselaere, G. van [1932], *Les Assurances-Transports*, Bruxelles.
- Stephinger, L. [1931], *Versicherung und Gesellschaft*, Jena.
- Trenerry, C.F. [1926], *The Origin and Early History of Insurance*, London.
- Wagner, A. [1893], *Versicherungswesen* (in Schönbergs Handbuch der politischen Oekonomie, Zweiter Band, Zweiter Halbband, Vierte Auflage.)
Tübingen.
- Willet, A.H. [1902], *Economic Theory of Risk and Insurance*, New York.
- Wirth, K. und Fromm, G.E. [1935], *Das Versicherungsgeschäft*, Leipzig.
- Wörner, G. [1910], *Allgemeine Versicherungslehre*, Zweite, vermehrte und verbesserte Auflage, Leipzig.
- Young, T.E. [1920], *Insurance*, 2. Edition, London.

(11) 近藤[1940]は、註に文献表示があるので、そこに記載された外国文献を

下記に掲載する。

Barou,N.[1936],Co-operative Insurance.

Bergius,J.H.L.[1767],Assekuranzanstalten(Bergius,Policey und Cameral
Magazin, I Band).

Brämer,H.und Brämer,K.[1894],Das Versicherungswesen.

Braun,H.[1925],Geschichte der Lebensversicherung und der Lebensver-
sicherungstechnik.

Cohn,G.[1898],System der Nationalökonomie,Bd. III.

Dörfel,F.[1931],Versicherungswirtschaftslehre,Wien.

Elster,L.[1880],Die Lebensversicherung in Deutschland,Ihre Volk-
swirtschaftliche Bedeutung und Die Notwendigkeit ihrer Gesetzlichen
Regelung.

Gebauer,M.[1895],Die sogenannte Lebensversicherung.

Gobbi,U.[1897],Die Theorie der Versicherung begründet auf den Begriff
der eventuellen Bedürfnisse (Zeitschrift für Versicherungs-Recht-und-
Wissenschaft,Bd. III.)

Gow,W.[1911],Marine Insurance.

Grosse,R.W.[1928],Wirtschaft und Versicherung.

Grosse[1933],Betrachtung über die sogenannte Selbstversicherung
(Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .

Haines,F.H.[1926],Chapters of Insurance History.

Helpenstein,[1930],Theorie der Versicherung;Privat-und Sozialver-
sicherung (Das Versicherungsarchiv Nr.5) .

Helpenstein,F[1931],Versicherungswissenschaft und Objektivität (Das Ver-
sicherungsarchiv Nr.12) .

Herrmann,E.[1867],Die Theorie der Versicherung vom wirtschaftlichen
Standpunkte I Aufl..

Herrmann,E.[1897],Die Theorie der Versicherung vom wirtschaftlichen
Standpunkte 3 Aufl..

- Hinrichs[1875],Die Lebensversicherung,ihre wirtschaftliche und rechtliche Natur (Zeitschrift für das gesammte Handelsrecht,20Band) .
- Hülse,F.[1903],Die Versicherung als Deckung eine ungewisew Bedarfs (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Hülse,F.[1914],Versicherung und Wirtschaft.
- Hülse,F.[1917],Versicherungswissenschaft und Versicherungskunde (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Hupka,J.[1910],Der Begriff der Versicherungsvertrags (Zeitschrift für die gesamte Handelsrecht und Konkursrecht) .
- Jack,F.[1912],An Intoroduction to the History of Life Assurance.
- Jost,W.[1933],Zur Um-und Ausgestaltung des wirtschaftswissenschaftlichen Versicherungsbegriffs (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Jessen[1926],Der privat=und tauschwirtschaftliche Begriff der Versicherung (Festgabe für Otto Prange) .
- Kleinwächter,F.v.[1921],Lehrbuch der Nationalökonomie,3 Aufl.
- Knight,C.K.[1926],Advanced Life Insurance.
- Krosta,B.[1911],über den Begriff Versicherung.
- Kulp,C.A.[1928],Casualty Insurance.
- Leibniz,G.W.[1872],Assekuranzen (Klopp,Die Werk von Leibniz, I Reihe, Band) .
- Lexis,W.[1909],Begriff,wirtschaftlich in Manes,Versicherungs-lexikon, I Aufl.
- Leuckfeld,G.1901,Die Theorie der Versicherung in der deutschen Wissenschaft (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Lindenbaum,J.[1930],Ein Vierteljahrhundert der Bedarfstheorie der Versicherung (Zeitschrift für Nationalökonomie,B. II.Heft 1.
- Little[1937],Economics and Insurance (The Review od Economics Studies. Vol. V No.1.Oct.)

- Loman[1937],Insurance,Principles and Practices.
- Maclean,F.J.,The Human Side of Insurance.
- Magee,J.H.[1939],Life Insurance.
- Manes,A.[1909],Versicherungswörterbuch,1 Aufl.
- Manes,A.[1926],Neue inländische und ausländische Versicherungs-Schriften
(Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Manes,A.[1930],Versicherungs-Lexikon,3 Aufl.
- Manes,A.,Versicherungswesen, I Band, Allgemeine Versicherungslehre,5
Aufl.,1930, II Band,Güterversicherung,1931, III Band, Personenver-
sicherung,1932.
- Martin,F[1876],The History of Lloyd's and Marine Insurance in Great
Britain.
- Moeller,H.[1925],Zur Soziologie des Versicherungswesens (Kölner Vierte-
jahrshefte für Soziologie 5Jahrg) .
- Moldenhauer,P.[1925],Das Versicherungswesen, I Allgemeine Ver-
sicherungslehre,4 Aufl.
- Oldenberg,K.[1926],Wandel im privaten Versicherungswesen
- Paish and Schwartz[1934],Insurance Funds and Their Investment.
- Patterson,E.W.[1935],Essentials of Insurance Law.
- Philippovich,E.[1911],Grundriss der politischen Ökonomie,Bd. I ,9Aufl.
- Rau,K.H.[1863],Grundsätze der Volkswirtschaftspolitik II Abteilung 5 Aufl.
- Reatz,C.F.[1870],Geschichte der Europäischen Seeversicherungsrechts, I
Theil.
- Rellstab,E.[1882],Der Staat und das Versicherungswesen.
- Rohrbeck,W.[1912],Versicherungstechnik oder und Versicherungswis-
senschaft? (Wirtschaft und Recht der Versicherung) .
- Rohrbeck,W.[1932],Das Versicherungsbegriff und die Versicherungswis-
senschaft (Die öffentliche Versicherung,Nr.9) .
- Rohrbeck,W.[1934],Die Lebensversicherung in nationalsozialistischen

- Staat (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Rohrbeck,W.[1938],Bücherbesprechungen (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Roscher,W.[1879],System der Volkswirtschaft,Bd. I .
- Rothe,B.[1931],Grundlegung zu einer sozialökonomischen Theorie der Versicherung.
- Ruddlf,H.[1930],Die Spartenkombination in der deutschen Privatversicherung.
- Schaefer,W. und Lübstorff,F.[1916],Volkswirtschaft und Versicherung.
- Scharlau,M.[1929],Die Entstehung neuer Versicherungsweige.
- Schmid,R.[1934],Beitrag zur Systematik der Versicherungswirtschaftslehre (Das Versicherungsarchiv Nr.4) .
- Schmoller,G.[1904],Grundriss der allgemeinen Volkswirtschaftslehre,2 Teil.
- Schönpflug,F.[1933],Gobbi und die moderne Versicherungstheorie (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Sonnenfels,J.[1771],Grundsätze der Poliyez,Handlung und Finanzwissenschaft,2 Teil) .
- Trenerry,C.F.[1926],The Origin and Early History of Insurance.
- Tress,J.[1923],Die Verstaatlichung der Lebensversicherung.
- Wagenführ,H.[1938],Wirtschaftskunde des Versicherungswesens.
- Wagner,A.[1881],Bemerkung über einige Punkte des Versicherungswesens,Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik.
- Wagner,A.[1898],Versicherungswesen (Schönberg,Handbuch der Politischen Oekonomie, II Band2,4Auf.) .
- Weddigen,W.[1931],Der Versicherungsbegriff der Wirtschaftswissenschaft (Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft) .
- Wilson,A.=Levy,H.[1937],Industrial Assurance.
- Winter,W.[1919],Marine Insurance.

Wörner,G.[1920], Allgemeine Versicherungslehre,3 Aufl.

Wright and Fayle, A History of Lloyd's.

Zartman aud Price,[1923],Yale Readings in Iusurauce,Life and Accicent.

(12) 印南[1941]は、巻末に引用文献目録があるので、下記にはその「外国の部」を掲載する。目録にリストされている文献の数は、ドイツ34、イギリス4、アメリカ3、イタリヤ1である。

Barou,N.[1936],Co-operative Insurance,London.

Closterhalffen,C.[1939],Prüfung der technischen Posten und die Erfolgsgsanalze,in Der Wietschaftsprüfer,Neaue Folge Heft 6,Berlin.

Ditto[1935],Life Insurance,3.ed.,New York and London.

Ditto[1938],Insurance:Facts and Problems,New York and London.

Dörfel,F.[1931],Versicherungswirtschaftslehre,Berlin u. Wien.

Gehart,W.F.[1922],Principles of Insurance,Vol. I :Life,New York.

Gobbi,U.[1898],L'assicurazione in generale,Milano.

Gottl,F.V.[1933],Wesen und Grundbegriffe der Wirtschaft,Leipzig.

Gottl,F.V.[1936],Volk,Staat,Wirtschaft und Recht,Erster Teil,Berlin.

Hasenack,W.,Grundlagen der Betriebswirtschaft Deutsche Versicherungswirtschaft,Bd. I .Heft6.

Huebner,S.S.[1927],The Economics of Life Insurance,New York.

Hupka,J.[1910],Der Begriff des Versicherungsvertrags,in der Zeitschrift f.d. ges,Handelsrecht u. Konkursrecht,66.Bd.,Stuttgart.

Krosata,B.[1910],Ueber den Begriff Versicherung,Bonn.

Lexis,W.[1909],Beriff,wirtschaftlich,in Versicherungslexikon,1.Aufl.,Tübingen.

Lindenbaum,J.[1930],Ein Vierteljahrhundert der Bedarfstheorie der Versicherung,in der Zeitschrift für Nationalökonomie,Band II ,Wien.

Manes,A.[1924,1930],Versicherungslexikon,2.Aufl.,3Aufl.Berlin.

Manes,A.[1930],Versicherungswesen,5.Aufl. I .Allgemeine Versicherungsllehre,Leipzig u.Berlin.

- Moldenhauer, P. [1917], Das Versicherungswesen, I .Allgemeine Versicherungslehre, 3. Aufl., Berlin u. Leipzig.
- Patzig, A. [1925], Versicherungsbetriebslehre, Esslingen a. N..
- Randolph, W. D. [1930], Der Betriebsvergleich in der Lebensversicherung, Leipzig.
- Rausche, E. u. Kruse, R. [1937], Buchführung und Revision im Versicherungsgewerbe, Leipzig u. Berlin.
- Rohrbeck, W. [1937], Versicherungswirtschaft und Versicherungslehre, Ein deutsches Versicherungslesebuch, Berlin.
- Rohrbeck, W. [1939], Deutsche Versicherungskunde, Teil I Allgemeine Versicherungskunde, Berlin.
- Rohrbeck, W. [1939], Versicherungsgemeinschaft oder versicherte Gruppe? in der ZVW. 39. Bd. 3. Heft, Berlin.
- Rünger, W. Aufwand [1938], Leistung u. Gewinn in der Lebensversicherung, Würzburg.
- Schaefer, W. u. Lübstorff, F. [1916], Volkswirtschaft und Versicherung, Hannover.
- Schmid, R. [1934], Beitrag zur Systematik der Versicherungswirtschaftslehre, in Das Versicherungsarchiv, 5. Jahrg. Nr. 4, Wien.
- Transactions of the eighth international congress of actuaries. Vol. 1-5. London, 1927.
- Vivante, C. [1891], Allgemeine Theorie der Versicherungsverträge, in der Zeitschrift f. d. ges. Handelsrecht, 39. Bd., Stuttgart.
- Wagenführ, H. [1938], Wirtschaftskunde des Versicherungswesens. Versicherung und Volkswirtschaft, Stuttgart.
- Wagner, A. [1898], Versicherungswesen im Schönbergs Handbuch der Politischen Ökonomie, 4. Aufl. II. Band, 2. Halbband, Tübingen.
- Wagner, A. [1881], Der Staat und das Versicherungswesen, Tübingen.
- Waldheim, H. [1928], Das Versicherungswesen in seiner Entwicklung, Berlin.

- Weddigen, W. [1931], Grundfragen der Sozialversicherungsreform, Jena.
- Weddigen, W. [1930], Der Versicherungsbegriff der Wirtschaftswissenschaft, in der ZVW. 31. Bd. 3. Heft, Berlin.
- Weinreich, E. [1939], Die versicherte Gruppe als soziales Gebilde, in der ZVW. 39. Bd. 2. Heft, Berlin.
- Winter, W. [1929], Marine Insurance, its principles and practice. 2. ed., New York.
- Wirth, K. u. Fromm, G. E. [1935], Das Versicherungsgeschäft. Leipzig.
- Wöner, G. [1913], Der Staat und das Versicherungswesen, Kiel.
- Wöner, G. [1920], Allgemeine Versicherungslehre, 3. Aufl., Leipzig.
- Young, T. E. [1916], Insurance, A practical exposition for the student and business man, 2. ed., London.

(13) 西藤[1942]は、註に文献表示があるので、そこに記載された外国文献を下記に掲載する。

- Ackerman, S. B. [1928], Insurance.
- Aeberhard, R. [1940], Allgemeine Versicherungshre.
- Blumenthal, R. E. [1932], Wohnungsbau und Lebensversicherung.
- Braess, P., Wesen und Grenzen der “gerechten Prämie” , Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft, Bd. 39, Ht 1.
- Brämer, H. u. K. [1894], Das Versicherungswesen.
- Brass, A. [1937], Zeitgemässe Prämienpolitik, Der deutsche Volkswirtschaft.
- Brunn, P. [1930], Vrsicherungsfall (Manes, Versicherungslexikon) .
- Fey, W. [1937], Lebensversicherung und allgemeine Wirtschaftstätigkeit.
- Gobbi, U. [1897], Die Theorie der Versicherung begründet auf den Begriff der eventuellen Bedürfnisse, Zeitschrift für Versicherungs-Recht- und Wissenschaft, Bd. 3.
- Greifzu, J. u. Ruge, K. [1938], Handbuch der Versicherung.
- Gürtler, M. [1933], Zur Preispolitik der Versicherung, Assekuranz Jahrbuch,

Bd.52.

Gürtler,M.[1935],Kalkulation der Versicherungsbetriebe.

Gürtler,M.[1936],Die Kalkulation der Versicherungsbetriebe.

Hardy,C.O.[1931],Risk and risk bearing.

Heinertz,E.[1932],Beitrag zum Anlageproblem in der Lebensversicherung.

Helpenstein,F.[1930],Theorie der Versicherung:Privat-und Sozialversicherung,Das Versicherungsarchiv,Jahrg.1.Nr.5.

Hermann,E.[1897],Die Theorie der Versicherung,vom wirtschaftlichen Standpunkte.

Herrmannsdorfer,F.[1924],Wesen und Behandlung der Rückversicherung.

Hülse,F.[1928],Versicherung und Wirtschaft,Ein Untersuchung über den Begriff der Versicherung in Volkswirtschaftslehre.

Hupka,J.,Der Begriff des Versicherungsvertrages, Zeitschrift für das gesamte Handelsrecht und Konkursrecht,Bd.66.

Kisch,W.[1930],Gefahr (Manes,Versicherungslexikon) .

Kisch,W.[1935],Die Ethik in Versicherungswesen, Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Ht.3.

Knight,F.[1921],Risk,uncertainty and profit.

Kurtz,B.[1937],Konjunktur und Versicherung.

Lehmann,M.R.[1928],Allgemeine Betriebswirtschaftslehre.

Leitner,F.[1915],Die Unternehmungsrisiken,Einzelwirtschaftliche Abhandlungen,Ht.3.

Lexis,W.[1909],Begriff (Manes,Versicherungslexikon) .

Lindenbaum,J.[1930],Ein Vierteljahrhundert der Bedarfstheorie der Versicherung,Zeitschrift für Nationalökonomie,Bd.2.Ht.1.

Little,L.T.[1937],Economics and insurance,The review of economic studies,Vol.5,No.1.

Maclean,J.B.[1935],Life insurance.

Manes,A.[1930],Versicherungswesen,Bd.1.

- Manes,A.[1932],Grundzüge des Versicherungswesens.
- Manes[1938],Insurance,facts and problems.
- Mellerowicz,K.[1933],Kosten und Kostenrechnung,Bd.1.
- Mowbray,A.H.[1937],Insurance.
- Nicklisch,H.[1932],Die Betriebswirtschaft,Vorwort.
- Oberparleiter,K.[1930],Funktion-und Risikenlehre des Warenhandels.
- Philipovich,E.v.[1905],Grundriss der politischen Oekonomie.
- Pomplitz,K.[1936],Die Kapitalanlage bei Versicherungsunternehmungen.
- Riebesell,P.[1937],Deutsche Versicherungswirtschaft, I .
- Riebesell,P.[1937],Der einheitliches Rechnungswesen in der Versicherungs-wirtschaft.
- Riegel,R. and Loman,H.J.[1937],Insurance,principles and practices.
- Rieger,W.[1928],Einführung in die Privatwirtschaftslehre.
- Rohrbeck,W.[1937],Versicherungswirtschaft und Versicherungslehre.
- Rohrbeck,W.[1939],Das Preisproblem in der Individualversicherung,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Bd.33,Ht.3.
- Rohrbeck,W.[1939],Versicherungsgemeinschaft oder versicherte Gruppe?,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Bd.39,Ht.3.
- Romeike,W.[1935],Versicherung als Mittel industrieller Risiko-und Kostenpolitik.
- Römer,K.[1938],Privatversicherung und Preisstopverordnung.
- Rothe,B.[1931],Grundlegung zu einer sozialökonomischen Theorie der Versicherung.
- Schellenberg,E.[1936],Individualisierung und Schadenverhütung,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Ht.1.
- Schellenberg,E.[1936],Zur Individualisierung der Prämie,Das Versicherungsarchiv,Nr.3.
- Stadler,M.[1932],Studien aus der Theorie des Risikos,Betriebswirtschaftliche Forschung des Wirtschaftsverkehrs.

- Tamm,H.[1932],Betrachtung zur Preisbildung in Privatversicherung,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Ht.3.
- Tardy,M.L.[1938],Report on systems of agricultural credit and insurance.
- Tönnies,F.[1917],Das Versicherungswesen in soziologischen Betrachtung,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Ht.4.
- Vivante,C.[1891],Allgemeine Theorie der Versicherungsverträge,
Zeitschrift für das Handelsrecht und Konkursrecht,Bd.39.
- Wagenführ,H[1938],Wirtschaftskunde des Versicherungswesens.
- Wagenführ,Preisbildung,Preisstop und Preissenkung in deutschen Kraft-
fahrzeugversicherung, Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wis-
senschaft,Bd.39,Ht.1.
- Wagner,A[1881],Staats und Versicherungswesen.
- Wagner,A[1898],Versicherungswesen,Schönbergs Handbuch der Politis-
chen Ökonomie.
- Weddingen,W.[1931],Der Versicherungsbegriff der Wirtschaftswissenschaft,
Zeitschrift für die gesamte Versicherungs-Wissenschaft,Bd.31.
- Willet,A,[1901],The economic theory of risk and insurance.
- Wirth,K.u.Fromm,E.[1935],Das Versicherungsgeschäft.
- Wöner,G.,Allgemeine Versicherungshre.

(14) 園[1942]は、文献表示、文献リストがないので、本文中に登場する文献を下記に掲載する。

- Cohn,G,System derNationalökonomie.
- Dean,A.F.[1880],Irregular Frame Exposure.
- Elster,Die Lebensversicherung in Deutschland.
- Gephart,W.F.[1911],Principles of Insurance.
- Gobbi,Ulisses[1897],Theorie der Versicherung,Zeitschrift für Ver-
sicherungs-Recht und Wissenschaft,Bd II & III.
- Hülse,F.[1914],Versicherung und Wirtschaft,Jahrbuch für

- Natinalökonomie und Statistik,Bd.104..
- Huebner,S.S.[1923],Life Insurance.
- Huebner,S.S.[1923],Property Insurance.
- Hupka,J.,Der Begriff des Versicherung, Zeitschrift für das Handelsrecht und Konkursrecht,Bd.66.
- Kohler,Josef,Versicherungsrecht,Dernburgs bürgerliche Recht,Bd. VI.
- Krosta,Benno[1910],Ueber den Begriff der Versicherung.
- Lemmon,W.S.[1916],the L.&L.Rating system,designed to effect Standardization of Fire Insurance Rating.
- Lexis,W.[1902],Versicherungslexikon.
- Manes,A.Versicherungswesen,Bd. I .
- Marshall,Samuel[1808],A Treatise on the Law of Insurance.
- Masius,E.A.[1857],Systematische Darstellung des gesamten Versicherungswesens.
- Moldenhauer,P.,Versicherungswesen,Bd. I .
- Moore,F.C.[1891],Fire Insurance and How to build.
- Richards,E.G.[1915],The Experience Grading and Rating Schedule.
- Riegel,R=H.J.Loman.[1921],Insurance,Principles and Practices.
- Trenerry,C.F.[1928],Origin and Early History of Insurance.
- Vivante,C,Contratto di Assicurazione.
- Wagner,Adolf[1898],Versicherungswesen,Schönbergs Handbuch der politischen Oekonomie Bd. II .
- Willett,A.H.[1901],Economic Theory of Risk and Insurance.

以上から、改めてドイツの影響の大きさが確認できる。当然のことながら、保険本質論重視と関係するので、多くのテキストが取り上げているものは、保険本質論に関わる文献＝ドイツの文献が多い。

4. パターン化した考察

少々学問的な立場は異なっても、テキストでは当然考察すべき対象というものがある、いわばパターン化した考察対象というものがある。そのような考察対象に基づきながら、戦後につながる流れも意識してチェック項目を用意し、その項目に従って本稿で取り上げたそれぞれのテキストの特徴を明らかにしつつ、戦前のテキストの全般的な傾向を確認するために作成したのが、巻末の表(表8)である⁷⁾。また、このような考察を通じて、戦後のテキストとの比較に資するようにしたい。表8の各チェック項目に対する考え方は、以下のとおりである。

(1) 保険学の位置づけ

多くの文献において、序や独立した箇所を設けて保険学がいかなる学問であるかを考察している。まさに、保険学の形成過程であったことの反映であろう。柴 [1931] は、保険学は広義、狭義に分けられ、前者は保険経済学、保険法学、保険数理学、保険医学、保険財務学などのおよそ保険に関するすべての学問を包含し、後者は経済学の一部門に属する保険経済学であるとする。また、保険学は前者のような総合科学か後者のような保険経済学であるかで議論があり、前者の立場に立つものに栗津清亮、三浦義道、後者の立場に立つものに志田鍾太郎、小島昌太郎、米谷隆三があり、柴は前者の立場に立つとする(柴 [1931] pp.5-7)。磯野 [1937] は、保険学について独立した科学とするか

7) 亀田[1933]は保険数学のテキストである。冒頭に保険数学を理解するための前提として保険の基礎について解説しているが、そこでは入用充足説的な保険の把握(保険の定義・保険本質論)、保険の分類が示される(亀田[1933]pp.1-12)。そのうち保険数学の予備知識として関連学問をあげるが、そこで保険学について、すでに示された保険本質論、保険の分類の他に、「保険の必要、利弊、政策、沿革、会社の組織、類似制度との区別等述ぶべきことも少なくない」(同p.15)との指摘がある。また、印南[1974]では、志田[1927]の骨組みを継承し、大成させたのは勝呂[1939]であるとし、保険の意義、保険学の意義、保険の効用と悪用、保険の沿革、保険事業経営の限界、保険の分類、保険事業の経営、保険政策といった各種の観点からの考察を特徴とする(印南[1974]p.317)。表8で取り上げた項目の多くが、亀田[1933]が出版された昭和初期、遅くとも印南に示唆される昭和10年代にはパターン化していたことがうかがえる。

否かで論争があり、肯定説にマーネス、粟津、三浦、否定説にロールベック、小島、米谷をあげ、磯野は肯定説に立つとする（磯野 [1937] p.2）。独立した科学か否かという問題は、経済学の一部門とすれば独立せず、総合科学とすれば独立するといえるので、柴 [1931]、磯野 [1937] の指摘する争点は、同じであるといえる。

粟津 [1921] では、英米流の分化的講究に対して「保険の総合的講究を目的とする」（粟津 [1921] 序p.4）としていることから、海上保険論、生命保険論といった保険各論ではなく、保険総論を指向するということであろう。しかも、経済学に基づくとしていることから、保険経済学を土台にしているといえる。換言すれば、保険一般という次元での考察を求めているといえ、その次元の考察で基本となる学問は経済学であるとする。保険の講究は「経済学の領域に属す」（同p.59）とし、柴 [1931]、磯野 [1937] が粟津と対立とする小島を「保険の総合的経済学的講究に時代を画成するの人」（同p.84）として高く評価する。しかし、海上保険論が保険法学と結びつき、生命保険論が保険数学と結びつくように、保険各論が特定の学問的色彩を帯びているため、粟津 [1921] で分化的講究として考察されるものは、アクチュアリー学、保険医学、保険法、労働保険であり、粟津 [1921] では経済学による総合的講究が強調されるものの、後述の三浦 [1935] によれば三浦と同様な総合保険学重視の立場とされる。そして、その総合保険学がドイツ流の集合科学を意味するとすれば、保険経済学を重視するといっても、ドイツ流集合科学を否定し、保険経済学を土台にすべきとの小島の見解とは対立することとなる。

このように、保険学のあり方をめぐる考察があり、また、対立があるので、保険学のあり方を考察しているか（「保険学のあり方」）、いずれの立場に立つか（「保険経済学」、「集合科学」）を項目とした。対立する見解への批判を明記している場合は「×」とし、特に明記していない場合は「—」とした。粟津は集合科学論者とみなされているが、粟津 [1921] の時点ではもっぱら保険経済学の重要性を指摘し、総合の意味も集合科学的な意味よりも保険各論に対する保険一般を対象とした保険総論を指向するという意味に重点が置かれていると思われ、集合科学的見方については言及していないので、「保険経済学」の欄

に「○」、「集合科学」の欄に「一」を入れた。酒井 [1934] は、保険経営学に関してはかなり詳しく論じているが、保険学についてはほとんどないため、「保険学のあり方」の欄を「△」とし、その他は「一」とした。三浦 [1935] は、保険学は経済学の一分野としつつもその場合の経済学を広義の経済学とし、集合科学的な保険学の位置づけを広義の経済学に求めているようなので、「保険経済学」の欄に△、「集合科学」の欄に「○」を入れた。勝呂 [1934] は、経済的視角より統一的に解説せんとしたとするが、保険学をどう捉えているか明らかではないので「保険学のあり方」の欄を「一」とした。印南 [1941a] は経営経済学について詳しく論じ、保険経済学への言及もあるが、保険学をいずれと考えるか必ずしも明記していない。しかし、集合科学を否定する志田を支持する記述 (印南 [1941a] p.22) から判断した。西藤 [1942] は、集合科学や保険経済学についての考えが明記されていないが、保険学を経済学の一分野とする者より経済学的考察が徹底しているといえるので、集合科学に否定的であると思われる。

なお、もともと海上保険契約に関する保険法学として保険学が生成してきたこともあり、保険法学が優位であった。したがって、総合保険学を指向する場合のみならず後述の保険総論を指向する場合も保険法学が重視されることが多いので、この点に着目して保険法を重視しているか(「保険法」)もチェック項目とした。また、保険の特徴として、実にさまざまな保険があるという多種多様な保険の存在を指摘できるので、保険の考察は多種多様な保険に共通する考察と個々の保険に関する考察が重要となる。前者の考察を行なうのが保険総論であり、後者の考察を行なうのが保険各論である。そこで、学問体系は別として、テキストの体系として保険総論+保険各論を前提としたテキスト(「保険総論+保険各論」)が多いので、これもチェック項目とした。輸入学問という観点で考えると、ドイツ集合科学的保険学の影響が大きいが、イギリス、アメリカ流の実践的保険各論の影響もあり、保険総論+保険各論という構成には、これらの海外の学問の影響も無視できない。

(2) 保険本質論

戦前のテキストに対してまず指摘すべき特徴としては、ドイツ保険学の影響を強く受けて、保険の本質が重視されていることである。そこで、保険本質論をチェック項目とする。保険本質論について、保険学説の比較検討を行い、自ら支持する学説を明示し、自分なりの定義を行い、その定義文から保険の要件を導き出すという考察パターンが散見される。これが戦後本格的な保険本質論争、さらに過度な保険本質論争に陥って、自分の支持する学説の明示に留まらず、自分自身の学説を明示するのが必要といった状況になって、保険学者の数だけ保険学説があるといった過度な論争状態に陥った。こうした戦後への流れを踏まえながら、さまざまな保険学説を取り上げて比較検討しているか（「保険学説」）、保険の定義を行っているか（「保険の定義」）、保険の要件を導き出しているか（「保険の要件」）、独自の保険学説を提唱しているか（「独自の保険学説」）をチェック項目とした。また、保険学説自体は損害説から非損害説へと進化したが、リスクとの関係で今日では逆に損害と結び付ける見解が有力となってきたことから、「損害概念の重視」をチェック項目とした。また、相互扶助を重視する見解がみられ、現在においてもわが国ではその傾向が根強いことから、保険を相互扶助とするか（「相互扶助」）もチェック項目とした。さらに、保険団体の形成を重視する見解が多く、また、保険技術や保険の社会性の認識などとも関わる重要な点なので、保険団体を重視しているか（「保険団体」）もチェック項目とした。

（3）保険類似制度、保険可能の範囲

考察対象の特徴を浮かび上がらせる方法の一つとして、似て非なるものとの比較をするというのがあげられよう。保険では、保険の本質、特徴を明示するための方法として、保険類似制度の考察をすることがパターン化している。特に、保険の要件を導き出し、その要件との関係から、各保険類似制度のどこが保険に似ていて、どこが違うのかを明らかにする考察がパターン化しているといえる。そこで、保険類似制度の考察（「保険類似制度」）をチェック項目とした。また、保険が要件をもつということは、その要件が揃わないと保険は成立し得ないということになり、保険可能な範囲が画されている、あるいは、保険

には限界があるということになる。こうした保険可能の範囲、保険の限界についての考察（「保険可能の範囲」）もよく行われることからチェック項目とした。

（４）保険の分類

さまざまな保険があるので、それを分類するということが非常に重要である。さまざまな基準で保険を分類することで、保険を多面的に把握することができ、保険の性格を把握できる。ただし、この場合の分類とは、ある所に焦点を当てその他は捨象するといった分類となるので、分類の目的が限定的であり、重要である。この分類には、実際上の理由や歴史的な経緯で作られた非科学的な便宜的分類が含まれることに注意を要する。もう一つ重要な分類は、多種多様な保険を総体として把握するのに資する分類である。保険の分類の考察は、もっともパターン化した考察の一つといっても過言ではないが、注意を要するのは、保険の分類にはこの2種類があるということである。換言すれば、さまざまな基準で保険の特徴を明らかにする分類と体系的把握を指向した総体としての保険を把握するための基準による分類である。それぞれのテキストが保険の分類自体を行っているのか（「保険の分類」）、行っている場合単なるさまざまな基準（「さまざまな基準」）なのか、体系的把握を指向しているのか（「体系的把握」）をチェック項目とした。また、多種多様な保険の存在の前提に保険企業が多様であることがあげられる。このため、保険事業の経営主体の考察（「保険事業の経営主体」）を行っているかもチェック項目とした。

（５）保険史、保険の近代化、保険政策

学問体系の標準の一つとして、理論・政策・歴史があげられる。保険学においては、保険理論はまず取り上げられ、保険史もどの程度の考察をするかは別れるものの取り上げられることが多い。これに対して、保険政策はあまり取り上げられない。また、保険史の考察において重要なことの一つは、保険が近代資本主義社会においていかに生成したかである。そのために、保険の近代化が保険史において重要である。そこで、保険史の考察（「保険史」）を行っているか、行っている場合、保険の近代化の考察を行っているか（「保険の近代化」）

をチェック項目とした。なお、相互扶助を古代の制度から現在までに共通する保険の特徴としつつ、合理的な拠出を行っているか否かを基準に原始的保険、現代的保険とする見解が一つの有力な見解といえるので、この点のチェックも意識している。また、保険政策を取り上げているか（「保険政策」）もチェック項目とした。

（6）保険の利益・弊害

保険にはメリット、デメリットがあるので、それらを整理する考察が行われるがその考察（「保険の利益・弊害」）をチェック項目とした。保険のメリットは「保険の価値」などの表現で考察されたりもする（柴[1931]、三浦[1935]）。また、保険の利益と似ているが、保険は独自の機能を果たしており、保険の目的や機能、効果といった点の考察（「保険の機能・効果」）もチェック項目とした。

（7）保険金融

保険の機能といえば、経済的保障機能のほかに、蓄積された保険資金の運用という金融的機能がある。金融的機能は付随的機能として往々にして軽視されるので、保険金融を考察対象としているか（「保険金融」）もチェック項目とした。

（8）保険の二大原則（給付・反対給付均等の原則、収支相等の原則）

保険の二大原則こそは、保険によって形成される貨幣の流れを十分に説明できる重要な原理であり、保険理論の核心部分であると考えられる。そこで、これを取り上げているか（「保険の二大原則」）をチェック項目とした。戦前は、レクシスの原理をめぐる考察で混乱がみられ、戦後二大原則的把握が確立してくるので、個別の取引の次元と保険団体の次元の二元的に考察しているものはほとんどない。

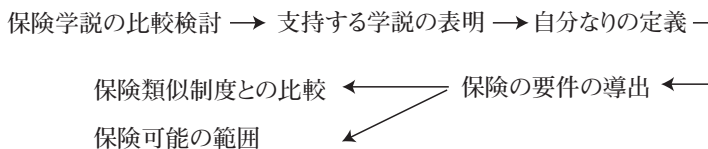
表8から、次のような傾向がうかがえる。

保険学自体をどう捉えるかが大問題であったといえよう。すなわち、ドイツ

流の総合保険学を保険学として目指すべきとする見解とそのような集合科学は知識の寄せ集めで学問，総合科学とはできず，保険は経済制度であるから保険学はまず保険経済学でなければならないとする見解の対立である。保険の考察において，誰もが保険法学，保険数学，保険医学などが重要であると考えてであろうが，前者の保険学を指向すればこれらの学問が保険経済学と対等の関係に立って，保険学の体系が考えられるのに対して，後者の保険学を指向すれば保険経済学が土台でそれ以外は補助諸学として保険学の体系が考えられよう。しかし，テキストの次元でみれば，同じ保険総論でも前者は保険法学，保険数学などが入ることが多く，後者は経済学，経営学的考察が中心となる傾向があるものの，その構成に大きな違いはない。また，前者であれ，後者であれ，基本的に保険総論＋保険各論という構成である。

保険の本質に関しては，図12のように把握できるのではないか。すなわち，保険学説を比較検討し，その中から自ら支持する学説を表明し，自分なりの定義を行い，その定義文から保険の要件を導出し，その要件を使って保険類似制度との比較検討を行う，また，要件を基本に据えて保険可能の範囲を考察する。保険学説の検討は行わず支持する学説を表明したり，いきなり自分の定義から始めるものがあつたり，保険の要件の導出を行わずに保険類似制度との比較検討をしたり，保険の本質を必ずしも関連させずに保険類似制度との比較や保険可能の範囲の考察を行うものもあるが，それらを包含した一つの典型的なパターンとして図12のように捉えることができるのではないか。これが戦後に受け継がれ，戦後においてもパターン化しているといえる保険学説，保険類似制度，

図.12 保険の本質に関連した考察



(出所) 筆者作成。

保険可能の範囲の考察になっていると思われる。また、保険学説の検討→支持する学説の表明→自分なりの定義が保険本質論争となり、独自の学説→独自の定義へとエスカレートしていったのではないか。

さらに、保険の本質把握において、保険団体が重視され、団体形成＝多数の経済主体の結合に相互扶助が重視されている。さらに、非損害説が優位となっていることも指摘できよう。

保険の分類については、ほぼ完全にパターン化しているといえ、それはさまざまな分類基準は一つの知識としてテキストで取り上げられるべきものと位置づけられているからであろう。そうしたなかで、一部体系的な分類などを指向するものが散見されるが、あえてこのような分類を試みるのは、上記の保険学に対する考え方の違いといった点からではなく、分類の考察の目的にあると思われる。多種多様な保険に対し、各種保険の性格を把握するためにはさまざまな分類が必要であり、目的に応じて各種分類を使えばよいであろう。しかし、多種多様な保険が保険総体として社会にどのような役割を果たしているのかを分析するとなれば、何らかの基準で保険を総体として捉えるための体系的な分類が必要とされよう。必ずしもこの目的と同じではないが、明確な意図をもったいわば教科書的な分類以外の分類を指向している文献が散見される。また、多種多様な保険の存在理由である保険経営主体の多様性に対して、保険事業の主体の考察がパターン化しているが、これは必然的なものであろう。

保険史に関しては、大きく二つの考察の仕方があると思われる。一つは、保険総論において保険史を取り上げるというもの、もう一つは保険各論として各種の保険史を取り上げるというものである。もちろん、両者は二者択一ではなく、本来どちらでも取り上げられるべきものであろうが、保険史をどう位置づけるかという点で違いがある。保険史は個々具体的な史実の研究が基本となろうから、個別の具体的な保険が題材とならざるを得ない。したがって、海上保険であるとか、火災保険であるとか、個別の具体的な保険の考察となる。そのことで必然的に保険各論に結びつき、保険史は保険各論を構成すると考えられそうであるが、個別具体的な保険の展開で現象する保険総体としての生成・発展を考察するのではなくては、保険史としての意味はないのではないか。特に、近

代保険の生成・発展は保険史の中核をなすテーマの一つといえ、これは保険各論で取り扱われるべき問題ではないであろう。理論・歴史・政策といった保険学の体系の次元で把握すべき問題である。保険各論として各種保険のそれぞれの歴史を考察することは意味のあることであろうが、それをもって保険史の考察とするのではなく、保険総論として総体としての保険の生成・発展を考察すべきである。こうした保険史考察の方法論的な点についての議論がないまま、多くの文献が保険史を取り上げパターン化した考察となっているので、総じて保険学の体系、考察の目的についての意識が低いといわざるを得ない。

また、保険史考察の重要なテーマである近代保険の生成・発展に関しては、原始的保険と現代保険の違い、現代保険の発生といった考察が多く、通説的には合理的保険料の算出がメルクマールとされる。また、二大勅許会社など近代的会社形態の保険会社の設立をもって現代保険の成立とする見解もある。保険の近代化を含めて、保険史考察の方法論的考察が不十分である。

保険政策については、保険史の考察に比べるとパターン化しているとはいえず、保険国営論との関係での考察も多い。公的保険の存在は保険国営のみならず、政策手段としての保険の活用という点についての考察を必要とすると思われる、保険市場の規制のあり方、民間保険企業の監督のあり方といった点とともに重要な点であるが、本格的な保険政策論はほとんど見られなかった。

保険の利益・弊害は現在ではほとんど見られない考察パターンであるが、戦前は結構見られたパターンといえよう。保険の機能・効果の考察と重複する面があること、保険の弊害の中心はモラルハザードで現在では単なる弊害を超えた考察テーマとなっていることから、この考察パターンが今ではあまり見られなくなっているのであろうか。

保険金融については、保険を金融的に把握するなど、保険の金融面を重視している論者が例外的に取り上げているといった程度である。それでも、生命保険資金を中心とした保険資金が巨大となるにつれて、保険金融に関する考察が徐々に重視されつつある感じはする。

保険の二大原則については、「給付・反対給付均等の原則」の訳語自体が定着しておらず、例外的にしか取り上げられていない。 $nP = rZ$ の形で収支相等

の原則に触れるものは印南 [1941a] ぐらいである。大数の法則が単なる危険率算出の方法と捉えられ、個別の契約（取引）の均衡と保険団体レベルの均衡を結びつける役割をしているということを軽視している。保険原理の考察が不十分であることが、保険を相互扶助とする議論を許しているのであろう。

最後に、本稿の目的である伝統的保険学の特徴を導き出せば、次のとおりである。

保険学のあり方について、ドイツ流の集合科学とするものと保険経済学を土台とするものとの対立があるが、保険総論、保険各論という枠組みがとられている。

保険の本質が重視され、これを中心として保険類似制度、保険可能の範囲などの考察がなされる。

保険の性格について、団体性、相互扶助性が重視される。

保険の特徴として合理的拠出が重視されるが、貨幣制度である保険の貨幣の流れ、特に保険金融についてはあまり考察されない。

レクシスの原理の理解に混乱が見られ、現在の保険の二大原則のような考察になっておらず、原理的な考察が不十分である。

保険史において、海上保険における自助的な流れを直接的な系譜としつつも相互扶助の流れも重視され、理論、歴史いずれにおいても相互扶助を重視する。

表 8. 各文献の特徴

	奥村 [1912]	栗津 [1921]	志田 [1927]	小島 [1929]	柴 [1931]	末高 [1932]	酒井 [1934]	三浦 [1935]	磯野 [1937]	勝呂 [1939]	近藤 [1940]	印南 [1941a]	西藤 [1942]	園 [1942]	
(1) 保険学 保険経済学 集合科学 保険法 保険総論+保険各論	○ × ○ ○ ×	○ ○ 1 × ×	○ ○ × × ×	○ ○ 1 × ○	○ × ○ × ○	○ ○ × × ○	△ 1 1 × ○	○ △ ○ × ○	○ × ○ ○ ○	1 1 1 × ○	○ ○ × × ○	○ ○ × × ×	○ ○ 1 × ×	1 1 1 ○ ○	
(2) 保険本質論 保険学説 保険の定義 独自の保険学説 損害概念の重視 相互扶助 保険団体 保険の要件	× ○ × ○ × ○ ○	× ○ × ○ × ○ ○	× ○ × × × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ × ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ × ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × × ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○ ○ ○
(3) 保険種別制度 保険 possible の範囲	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ×	○ ○	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	× ×	× ○	○ ○	
(4) 保険の分類 さまざまな基準 体系的把握 保険事業の主体	○ ○ × ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	× × × × ×	○ ○ × × ×	
(5) 保険史 保険の近代化 保険政策	○ × ○ ○	○ × × ×	○ × ○ ○	○ ○ × ○	○ × ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ ○ × ○ ○ ○	○ × × ×	○ ○ × ○ ×	○ ○ × ○ ×	× × × ×	× × × ×	○ ○ × ○ ×	
(6) 保険の利益・弊害 保険の機能・効果	× ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	× × × ×	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	× × × ×	× × × ×	
(7) 保険金融	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○	
(8) 保険の二大原則	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	× ×	△ △	△ △	△ △	△ △	△ △	△ △	△ △	

注) 1. チェック項目を充足する場合を○、充足しない場合を×とした。
 2. 保険の定義、または、独自の学説のところの名称は、保険学説名である。
 3. 「保険の近代化」の記載事項は、近代化の条件または史実、近代化の時期である。
 4. 二大動請会社とは、The London Assurance Corporation、The Royal Exchange Assurance Corporationである。
 5. 「保険の二大原則」の△は、レフランスの原理（給付・反対給付均等の原則）のみの考察を行っているものである。

参考文献

- 栗津清亮 [1921], 『保険学綱要』改訂版, 巖松堂。
- 印南博吉[1941a], 『保険経営経済学』笠原書店。
- [1941b], 「レクシスの保険原理」『明治大学商学論集』第33巻4・5号, 明治大学商学部研究所。
- [1951], 「保険に関するレクシスの原理」『保険学雑誌』第378号, 日本保険学会。
- [1974], 「保険総論」日本経済学会連合編『経済学の動向(下)』東洋経済新報社。
- 磯野正登[1937], 『保険学総論』保険経済社。
- 亀田豊治朗[1933], 『保険数学』共立社書店。
- 近藤文二[1940], 『保険学総論』有光社。
- 小島昌太郎[1925], 『保険本質論』有斐閣。
- [1928], 『保険本質論』改定第2版, 有斐閣。
- [1929], 『保険学要論』日本評論社。
- 米谷隆三[1937], 『保険の研究』有斐閣。
- 三浦義道[1924], 『保険学』巖松堂。
- [1935], 『保険学』改訂11版, 巖松堂。
- 水島一也[2006], 『現代保険経済』第8版, 千倉書房。
- 西藤雅夫[1942], 『保険学新論』立命館出版部。
- 小川浩昭[1987], 「保険業法第86条準備金の経済分析」『損害保険研究』第49巻第3号, 損害保険研究所。
- [2008], 「保険教育と保険学の体系——カリキュラムの考察」『西南学院大学商学論集』第55巻第1号, 西南学院大学学術研究所。
- 大林良一[1995], 『保険理論』第3版, 春秋社。
- 奥村英夫[1912], 『保険通論』第3版, 東京博文館。
- 柴官六[1931], 『保険学概論』賢文館。
- 志田鍾太郎 [1927], 『保険学講義』明治大学出版部。
- [1929], 『保険学要論』日本評論社。

酒井正三郎[1934], 『保険経営学』 森山書店。

園乾治[1942], 『保険学』 慶應出版部。

末高信[1932], 『私経済保険学』 明善社。

勝呂弘[1939], 『保険学』 叢文閣。

○本稿は、2007年度西南学院大学特別研究Cによる研究成果の一部である。

(2009年1月 稿)